全国高校生は政治闘争の先頭に起て!!高校を安保粉砕・日帝打倒の砦とせよ！

反戦高協

別冊

第二回全国大会報告集

日本革命に向う不抜の戦線を構築せよ！
マルクス主義高校生同盟　松本圭太郎

反戦高協第二回全国大会基調報告全文
第一編　総括提案　前議長　下村賢太

第二編　情勢分析「日帝のアジア侵略宣言を内乱に転化せよ！」
第三編　任務方針「70年4－6月安保決戦を450万高校生の闘いとせよ！　議長　木村精一

反戦高協中央機関誌

反戦高協（別冊）

● 目　　次

● 日本革命に向う不抜の戦線を構築せよ ……2
　マルクス主義高校生同盟　松本圭太郎

● 反戦高協第二回全国大会基調報告全文 ……9

● 大会へのメッセージ ……48
　「未来は青年のものである」　本多延嘉

● 「奔流」主要論文 ……53

反戦高協中央書記局

反戦高協第二回全国大会の大成果にふまえ

日本革命に向う不抜の戦線を構築せよ！

マルクス主義高校生同盟　松本圭太郎

序章　歴史を創造することの確信について

依然として、世界は困難な過渡期にある。一九一七年のロシアに響き渡った轟砲は、だがしかし歴史の淀みを作り、いまなおその濁りは失せない。だがしかし、われわれは再度の、それも決定的な歴史の足音を聞いた。せまりくる階級決戦は、ただわれわれの無条件の屈服を前程としないかぎり不可避である。歴史は三十年代への螺旋を描きながら一つの結論を求めている。われわれはこれに答えねばならない。

資本主義の最後の段階への推転および、ここにおいて不可避となったブルジョアジーとプロレタリアートとのあいだでの決戦をプロレタリアートのために、人類解放の方向に転ずる可能性＝革命の現実性をいまこそ見抜かねばならない。

戦後帝国主義におおいかぶさったアジア危機のはかり知れない重みが、ついには日本帝国主義のアジア侵略を促すとともに、帝国主義本国の危機を拡大再生産している。アメリカ帝国主義によるアジア軍事支配は動揺の極に達し、日米同盟の絆は戦後帝国主義の最も弱い環である日本帝国主義をもこのアジア危機と直結せしめた。腐朽せる資本主義＝革命の前夜としての帝国主義はその最も具体的な点での死滅への道を歩みはじめた。まずはわれわれこそがこの帝国主義の死に水を取ってやろうではないか。

それが歴史であり、われわれ高校生が自らの未来を自らの手で切り開く道だから。最も若く、最も未来をもったわれわれこそが歴史の主人公であるからだ。四～六月安保・沖縄決戦こそその突破口だ。「日帝のアジア侵略への道＝日本共同声明粉砕、沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒」の旗を高々と掲げよう。われわれはこの歴史創造に

向けての確信をすべての高校生にとって共有のものとしなければならない。

いまでこそ「革命の現実性」をあるいは、「十・八羽田精神」を口にすることはたやすい。だがしかし、十一月決戦を初めとするすべての闘いがこの「十・八羽田闘争」を起点とするとき、この歴史の転換点がいかに生み出されたかを鮮明にしておくことはいまもって有意義なことだろう。十・八羽田闘争を支えた核心点は次のところにある。第一に佐藤訪ベトナムの意味を日帝の参戦国化・全土基地化への布石であることを暴露し、第二にこの日帝の攻撃と対決し、それも単なる対決でなくして佐藤の訪ベトナム阻止をめざす＝軍事的勝利をもめざす峻烈な闘いとしたことである。それはまさに正しい政治路線と組織戦術であった。だがしかし、それだけではなにも出来ない、そこにこの方針を貫徹することの出来た組織＝中核派が存在していたことが第三の核心点である。

「正しい戦略・戦術」、「革命的な組織」、この二者が相互媒介的な有機的整合性を獲得したときすべてがはじまるのである。この事は言葉の上では簡単だ。しかし、正しい戦略・戦術を生み出し、体得することがいかなる苦難を要したか知る人は少ない。その単なる結果のみならず、その総過程を自らのものとしていかねばならないものなのだ。それをもってはじめて論理は確信へと転化し、確信は革命へのパトスを生む。我々は自らのもてる理論をさらに深化し、そして大衆の中に浸透させ、相互批判と自己批判をバネとし自らを革命家へと飛躍せしめる歴史創造の確信を打ち固めねばならない。このことを鮮明に、かつ具体的につきつめたものこそ反戦高協第二回全国大会なのである。

まさに第二回全国大会をとりまいた様々の要因は我々を苦しめるものばかりであった。それは大会への参加を処分恫喝をもって打ち砕こうとする学校当局の攻撃に始まり、捕導の名をもってプラットホームから学友を奪い去りまた、カンパを襲って逮捕して行く官憲の悪辣な反革命をも呼び起した。

だがしかし、反戦高協第二回全国大会は圧倒的成果を勝ちとった。二日間、のべ一、六〇〇名の学友は四～六月安保・沖縄決戦への方針を「四・二八沖縄奪還ゼネスト、首都制圧、四月闘争の管制高地を全国高校学園闘争へ、六月十万高校生の隊列を登場せしめる」といった鮮明かつ具体的なものとし、日本革命めざす不抜の戦線を構築したのである。

四～六月安保・沖縄決戦は「日米新時代」とは裏腹な「新時代」を切り開くだろう。そのときこそ第二回大会の本当のかつ目に見えるものとしての意義が明らかにされるだろう。だがそれでは遅い。いますべての学友が「歴史を創造すること」＝「革命」についての確信を共有せねばならない。そして共に四～六月を闘い抜こう。それは第二回全国大会のすべてを自らのものにすることだ。大会に不参加であった諸君は当然にも、大会に参加した諸君も本大会が獲得した一切を徹底的に自らのものとするべく基調報告の総学習を行なおう。そしてこの大会を支えた反戦高協総体の組織性をより強固なものに打ち鍛えよう。全国大会に結集する為に北海道や九州から東京に出てくるだけでも辛い闘いでありながら、革命に参加するということはそれの倍どころではすまない試練をくぐりぬけねばならないのだ。だがしかし、自らを歴史の嗣子とすることに一切の躊躇はいらない。

第一章　第二回全国大会が指し示した闘いの方向

十一月佐藤の訪米をもって打ち出された日米共同声明は七〇年代における日本帝国主義の基本路線を確定した。結論的に言うならば第一に七〇年斗争の爆発を「沖縄のペテン的返還」をもってのりきり、第二に日本帝国主義の内外に横たわる危機、それはアメリカ帝国主義を盟主とする戦後世界体制の根底的動揺に規定され、世界の帝国主義の中で最も弱い還としての日帝に集中的に表われた危機を日帝自身によるアジア戦略へののり出しによってのりきらんとする内外政策の反動的エスカレーションである。だがしかし、このことはもろくも十一月決戦によって打ち砕かれ、七〇～七二年の沖縄返還準備過程をして階級闘争の激裂なる展開過程としてしまった。それは同時にアジア危機の日本帝国主義内部への持ちこみをも意味し、日帝はいまにない窮地に追いこまれているのである。

ところでこの日帝をその根底から揺り動かす、あるいは動かすことの出きる要因は次の三点に集中的に表わされている。それは第一にアジア侵略へと歩みを進めることによるアジア危機の内在化、第二は七〇～七二年の沖縄返還準備過程のもつ反人民性に対する沖縄人民の斗いの爆発、第三は日帝が世界経済の中へ深々と身をのり出したことにより国際通貨体制の崩壊的動揺と同道しなければならなくなったことである。

第一節　日帝のアジア侵略の危機を内乱へ

さて戦後日帝の発展は、敗戦帝国主義でありながら戦後世界支配体制の有機性の為に日米安保同盟を軸としながら再建されることを出発点とする奇形世界によって生み落とされた奇形児であった。このことは現在においても日帝を世界帝国主義の中において最も弱い環としている。ところで占領、単独講和と安保、憲法と議会制をその一方としながら、重化学工業中心の高度成長を成しとげてきた日帝は、だがしかし国際的な存立条件の危機的変動を機に一大転換をせまられる結果となった。それはほかならぬアメリカ帝国主義を盟主としてはじめて維持されて来た戦後世界体制の動揺とこれの原因でもあるアジア危機の深化である。このことはいわゆる高度成長政策を困難化し対外的には先進国間の経済戦争を激化せしめ、アジア進出をよりむずかしいものとし、しかも「守るべき権益」を増大させた。国内的にも独占間の死闘が全面化し、労働力の欠乏を資本にとって耐え難いものにし都市問題、農業問題、財政問題がいかんともしがたいものとして日帝をしめあげている。

このような日帝の危機を背影として打ち出された日米共同声明は、一方においてアメリカ帝国主義が今日直面している危機の爆発的発展をなんとか回避してゆくために日本帝国主義の力をアメリカ体制の補強と修復のための重要な柱として動員せんとするものでありながら、日本帝国主義自身にとってはもっと積極的なアジア侵略の展開を目指す反動のエスカレーションなのである。だがしかし、ここ

で我々が見ておかなければならないのは、日帝の軍事的、政治的、イデオロギー的脆弱性である。その上にアジア侵略へとつき進む過程は反人民的政策のつみあげ、それも超ウルトラなものとなるであろう。この日帝の危機と侵略に供う反人民的政策に対し我々は「安保粉砕・日帝打倒」の基本路線を対置し敵の危機を押し進め、それを個別実体的に打ち返すことによって、日帝のこの危機を内乱へと転化していかねばならない。このことはまったく現実的であり、これをもって解決していく以外ないものなのである。

第二節　沖縄奪還闘争をさらにおし進めよう

ところで第一節で語った日本帝国主義の反革命的策謀は沖縄の返還準備過程に凝縮して表われている。戦後の沖縄に対する帝国主義者の政策は一貫して基地の島として維持し、これに供って表われる人民の反撃を強権的にたたきふせるところにあった。それは文字通り沖縄が極東戦略の要石であり、一つの妥協や譲歩も許さないものであるからだ。このことをその核心となって保障していたものこそ本土と沖縄の分断支配であった。いま日米共同声明をもって沖縄は「返還」されるという。だがしかし、沖縄基地の安定確保という大方針は変らないどころか、逆にその維持・再編・強化をもくろんでいるのだ。つまりは分断を規定していた根本原理を否定するものでは一切ないばかりか、この「ペテン的返還」をもって人民の要求を逆手に取ろうとするものなのである。

すると七〇～七二年の沖縄返還準備過程はなにものをももたらさないどころか、様々の反人民的攻撃の激化を呼ぶのである。それはアメリカ帝国主義による沖縄基地の維持・再編・強化、米軍の整理・再編合理化と基地の安定度を高める為の異民族の現地民間人従業員の首切り、沖縄で教職員会と並ぶ大組織＝全軍労の切り崩し、それと七二年までに出来るだけの基地確保をしてしまおうとし、沖縄人民の生活破壊と権利の踏みにじりを強行しているのである。

これに対して日帝は「沖縄のペテン的返還」によってアジア侵略への道をはき清めようとし、七二年までにアメリカ帝国主義によって沖縄人民の生活・権利等の一切が破壊しつくされていることを利益とし、「本土並み」体制への移行と称して警察制度の強化を初め教育の反動化等に着手したのである。

もし沖縄人民の斗いが七〇～七二年の「返還」準備過程の反人民的展開と正面対決し、粉砕する立場に立って斗われるならば日帝打倒への巨大な突破口を切り開きうるものであることはまちがいない。すでに全軍労第三波ストの爆発は不可避であり、七〇年代階級斗争を内乱的に発展せしめる鍵は沖縄の闘いであることを鮮明にしている。

第三節　第二回全国大会が四～六月斗争の突破口を切り開いた

七〇～七二年闘争をもって第二段階へ突入した七〇年闘争の核心は前節で確認した通り沖縄の「返還」準備過程をめぐる大流動である以上、四・二八の闘いは決定的なものとせねばならない。この闘

いを全国高校ゼネスト全国からの総結集をもっての首都制圧の闘いとして鮮明化させた第二回大会の方針をわれわれは一切の躊躇なく貫徹しよう。

このことは我々に対して決定的な反省を要求している。「我々は現在少数派である。だがしかし、すべての高校生の未来を指し示すことをもって圧倒的多数派なのだ」とは第二回大会の記念講演において金山克己全学連委員長がわれわれに投げかけた言葉であるが、まさに現在のわれわれを適格に表現しているかもしれない。だがしかしそれではだめなのだ。文字通り多数派にならねばならない。選挙をやっても、議決をとっても常に勝ってしまう多数派でなければならない。

その多数派へ、大量の大衆をわれわれの下に結集するにはいかなる闘いが要求されているのか。それは昨秋闘われた青山闘争を頂点とする全国高校学園闘争のなかにもあった様に大衆自身に最も鋭い問いを行ない、大衆を分裂させ、具体的にはバリスト派、中間派、反バリスト派等への分裂の過程を通じてバリスト派を大々的に結集せしめていくのである。

その様な闘いはまず活動家の資質＝大衆へとけ込む能力等によって計られる。大衆の中へとけこみ、小児病を排し、大胆に大衆を獲得して行こう。

そして闘いの戦闘化と大衆化は矛盾しない。いや本当の激動期における戦闘性は大衆性をも保障するのである。

四・二八沖縄奪還ゼネストの成功の為に可能な限りのことをしよう。安保・沖縄問題・七〇年代の情勢・政治闘争の必要性・暴力の意義等を大胆に大衆の中へ持ち込め。クラス討論を生かし、全学集会・独自集会・講演会等を断乎組織せよ。生徒会　サークル等の合法機関を柔軟に駆使せよ。各校反戦高協の原則的活動＝会議・討論・学習会・ビラ・ステッカー・立カン・オルグが一切の鍵となる。その上で反戦高協を主軸に全共闘運動の大衆的発展を勝ちとれ。本当に四五〇万高校生を矣き動かす自信に満ちあふれよう！

第二章　高校を革命の砦に
革命の砦から帝国主義打倒へ

四・五・六月を沖縄奪還、安保粉砕、そして全国学園闘争として巨万の高校生を動員するということについてすべては鮮明である。我々はその上でその結果をも見抜いておこうではないか。

そもそも高校生が闘いに決起するということが当然でありながら、だがしかし帝国主義者による支配が最も貫徹していたはずの高校においてまで圧倒的な反乱がおこるということは彼らにとっておそろしくピンチな事態なのである。それに高校生が闘っているのに学生や労働者が無為の日を送っているなどということはないのだ。つまり高校生の闘いはすべての人民を闘いに起ちあがらせてしまうバロメーターなのだ。その上で高校秩序の破壊が直接に帝国主義者の存立基盤をむしばんでいくこともはっきりと見ておかねばならない。高校生という階層の発生そのものは原理論のような根本的なものをもたない。そもそも高校の発生はいわゆる六・三・三体系が戦後アメリカから直輸入されたことに具体的起源をもつものである。すなわち教育政策の一環であって十六才～十八才までを特殊化する様な

必要も現実もないのである。つまり高校生階層が作られたのはそれに内在化されている必然性ではなくして、ブルジョアジーの利害の貫徹したところの政策の結果なのである。よって高校および高校生運動を語るときにも「正しい教育」論とか「あるべき教育」論といった改良主義的課題をたてるのではなく、階級支配機構にガッチリとくみこまれたものとしてその本質をあばき、粉砕するものでなければならない。

ところで以上の様な意味を一面的に理解し現在的に高校生階層がもっているところの特殊な位置を精算し、「高校生運動は仮象にしかすぎない」と言って学生運動にアナロジーしてみたり、はては高校生はプチブルであると一蹴し、労働者の闘いのみが生産点とむすびついていて本当の意味があると高校生運動から招還していこうとしているものもいる。われわれはこれらに対して帝国主義が高校生にかけている「期待」の重さ、すなわちそれを粉砕せんとする高校生運動の重さをかたることによってそれらの小児病を問題外の領域へほっぽり出していこう。

現行の教育はいわゆる「多様化」と「人的能力開発」として露骨にあらわれているごとく帝国主義ブルジョアジーの意図を貫徹したものであることはいうまでもない。そのうえで近代資本主義がすでに剰余価値生産においてその形式を相対的剰余価値生産へと、すなわち資本の構成の有機的高度化を目ざすこと以外に利潤量の増大を追求しえないとするならば、個々の下部労働者までもの技術向上は絶対的な必要条件となる。それが表むきには公教育という仮面をかぶせられるならばこれほどいいことはない。現代における資本の要請はその意味で高校生の上に集中的にかけられており、激化する経済争闘戦を資本が生きぬく為にはこれら高校生にその未来＝我々にとっての抑圧と屈辱の時代をかけねばならない。

つまり高校がブルジョアジーの手許にあるかぎりその根もと＝経済的存立基盤はなかなかゆるがないのである。

だがもし高校が革命的プロレタリアの測に獲得されたらどうなるか。資本にとって剰余価値を生産すべき人間たちが、資本の内部においてそれ自身をつき崩す力となってしまうのである。そしてこのことはまったく現実的なのだ。ここにこそ高校生運動の今日的課題があると言わねばならない。

今の四五〇万高校生は未来を担う四五〇万労働者にもなれれば、四五〇万自衛隊員？にもなれる。要するに未来を最ももっているものが未来に対して最も強い力を宿しているということである。

現在の文部省、教育委員会等の攻撃の中に圧倒的に「高校生は未熟だ」という論理がある。また裏がえしの論理として「日教組の偏向教育」が高校生運動の原因だとして、現実の高校教育の矛盾を他に転嫁せんとしている。それらの論理のいきつくところ高校生はいずれにしても主体性をもちえず、ならば日教組の唯物史観ではなく「支配者の論理」を押しつけたいといったものである。我々は日教組の唯物史観なるものに一切の希望をもとめるものではないのだが、「支配者の論理」＝反動イデオロギー・戦争イデオロギーはまっぴらなのである。そして高校生の主体性一般を否定した地点から単純に革命的なイデオロギーのもちこみに終止するわけにはゆかないのである。高校生こそは少年期からの脱出をもって視野を世界に開くときであり、自らに課する問いのもっともラジカルなときであり、

かつ、それに自ら答えんとしてもっとも真摯なときである。支配者どもが一切の主体性を認めないでいるのは、高校生がいまだ階級支配における被支配者の立場になじんでいないときであり、古びた大人たちが様々の疎外感をもったとしても被支配者の日常性に埋没し自律的に自己の立場を被支配者においてしまっている＝疑じ主体的であるのと対照的であるからである。ならば高校生の中には現実社会に対して正に正常なる感覚を保持し、同持にもっとも革命的な思想のそだつ基盤をもっているといえる。支配者が恐怖するのもこの点であり、反対にこのことが高校生運動の大爆発を約束しているのである。

いまや疾風怒濤の七〇年代は日帝の危機を更におしすすめ内乱の現実性をよびさまし、これと対立する高校生のエネルギーが爆発的であることを鮮明にした。高校生は自らの持つ未来の可能性を帝国主義打倒にすえねばならない。ならば我々がめざす砦が思想的かつ実体的砦であり、革命の現実性の上にそそり立つのであるならば、それはもっとも攻撃的なものでなければならない。既得の権利を防衛する様な後退的なものでなく、一切の権利を奪われたところからあらゆる解放を目指す闘いの砦を必要としているのである。

このことは先取りされた「安保粉砕・日帝打倒」の路線をもって闘いが組織され、それが第二次学園闘争の質をもって全国高校をゆるがし、全国学園闘争への還流をもって大量の高校生を再度街頭へ流出させるものとするということである。

そしてこの総過程をもって革命的プロレタリアの下に獲得された高校生を全社会の隅々に浸透させるのである。すなわちこの砦は実体的に闘いを支える物質的基礎であり、その上に「革命の貯蔵庫」でなければならない。党建設を自らの闘いの内に包摂しつつ、帝国主義の実体的基礎を堀り崩すものとしての高校の砦化、これが我々の任務であり四・五・六月の闘いの圧倒的高揚の鍵である。

まさに砦の実体はわれわれであり、われわれの闘いが何万の高校生を四～六月に街頭に送り出せるかに一切がかけられている。

（了）

反戦高協第二回全国大会

基調報告全文（一九七〇年三月）

○ 総括　報告　前議長　下村賢太

○ 情勢分析「日帝のアジア侵略の危機を内乱に転化せよ！」

○ 任務方針「七〇年四～六月安保決戦を四五〇万高校生の闘いとせよ！」

報告　議長　木村精一

総括

報告

前議長　下村賢太

はじめに

いよいよ開始された疾風怒濤の時代、七〇年代はわれわれ高校生をも革命運動の渦中に引き込まざるを得ないだろう。それは六〇年代から七〇年代へと時代的転換の内に出現した「革命の現実性」にその一方の根拠を置いている。すなわち、六五年日韓条約締結以来日本帝国主義の動向を、侵略帝国主義として大担に見抜き、それに対応しえる主体の命賭けの飛躍として六七年　十・八羽田斗争を闘ってきたわれわれは、以来この二年有余を文字通り革命の現実性を赤裸々に暴露するものとして闘い切りひらいてきたのである。この二年有余の斗いの中でとりわけ昨年四・二八沖縄奪還大闘争への破防法弾圧といった日本帝国主義の伝家の宝刀の登場と、十一月佐藤訪米阻止闘争における自警団、全都戒厳体制、あるいは日米共同声明によるアジア侵略宣言などをもって革命の現実性を増々鮮明に浮き彫りにしている。日本の社会主義運動の創始者である往年の革命家、荒畑寒村氏は、こうした革命の現実性を次のような言葉で表現している。「日本の歴史を通じて数万におよぶ男女の青年労徒が、かくも広汎に、かくも公然と、かくも間断なく不撓不屈の勇気をもって現体制に返逆する闘争を展開したことがあったろうか。この明白凄烈な世紀の現象をみてなおかつ現体制の根底を揺るがしつつある革命的意義を認識しえぬものは、天空を色どる夕焼けに明日の晴天を予測する童児の知恵にもおよぶまい。」と。これは革命の現実性の主体的表現である。

かかる日本帝国主義の危機の全面化を四～六月安保決戦へと導き入れる歴史的使命を背負ったものこそ反戦高協第二回大会であることを冒頭で確認しておこう。

さて総括提案を行なうにあたって視座の確定を行なっておくべきだろう。すなわち、第一回大会からの総括上の視座とは、まず第一に先に述べた「革命の現実性」を時代的推移の内により鮮明にさせるということである。その第二は、高校生のよってたつ全社会的基盤の全面的崩壊＝再編強化の中での帝国主義教育に対する更なる矛盾の集中、激化による昨年来の高校生運動の爆発を如何にとらえるかである。しかもそれは、反戦高協という立場から洞察されるが故

に実践的＝主体的であり、したがって第一回大会以降の高校戦線における全ての闘争をわれわれの到達点へと結合しなければならないということからくるのである。つまり逆に言えば、結合するために反戦高協は過去の「何を」克服すべきかを、しかも如何に克服すべきかを解明するということである。ことわっておくが、われわれの到達点とは言うまでもなく四～六月安保決戦へ何をなすべきかを意識化している点であり、結論を先に言えば（抽象的にならざるを得ないが）七〇年代における高校生運動の自己規定であるだろう。これが視座の第三である。

本大会に結集した全国の闘う学友諸君！本大会の革命的成功は、全国四五〇万高校生総決起の共同源泉である。全ての高校生運動はここから出発し、ここに集約される。まさにわれわれは、徹底的に決意しなくてはならない。四～六月安保決戦への高校戦線の大胆な、巨大な登場の成否が、われわれ反戦高協の双肩にあるということを真剣に決意せよ！

第一節　反戦高協第一回大会の意義

一九六九年七月、全日本の民衆の注目と期待を一身に受け、日本高校生運動はじめての反戦高協第一回大会が首都東京で開催された。東京、大阪、京都、福岡、長野、愛知、新潟、鳥取、宮城、青森、等々おおよそ七〇〇名の反戦高協の同志諸君を結集し、反戦高協第一回大会は圧倒的にかちとられたのである。

反戦高協第一回大会の歴史的意義は、なによりもまずこのように全国的な規模で闘いとられたという点で画期的であった。六〇年安保闘争以降、その敗北的総括をめぐって崩壊していった高校生運動の唯一の統一指導部＝安保阻止高校生会議（安保ブント系列）以来、われわれは反戦高協をもって独自的な建設を革共同・全学連とともに行なってきた。六五年日韓闘争以来のこのわれわれの闘いは、まさにこの第一回大会の圧倒的成功をもって結実したのである。改めて確認するまでもなく、全国から結集した反戦高協の学友が、基本的な世界観の一致、進むべき道について確認するということは、文字通り組織として確立されてきたこと示すものなのである。組織的＝思想的一致は、具体的には六九年四・二八以降の時代を把握し、六九年秋の十一月決戦への明確な方針・任務の中にみてとることができる。従って第一回大会をめぐる状勢とは、何よりもまず破防法をも引きずり出したあの四・二八沖縄奪還大斗争以降の新たな時代の到来としてある。

敗戦処理過程の一環として分断された沖縄を真正面から奪還する斗いを我々の試練としてとらえ四・二八を爆発させ、さらに、それに対する破防法攻撃をもって戦后民主主義は、左右両極から音をたてて崩壊しはじめたのである。この戦后体制の崩壊は、高校生の中に雪崩れうつ価値観の転換を生み出していった。こうした四月二八日を前后する時代の特質は戦后民主主義を自らの手で破壊し、露骨な反革命的制動の展開を開始し、全都ロックアウトにみられる沖縄問題へのすりかえが行なわれる中で、人民大衆の深部において革命と反革命の分裂が開始されたということである。それは開始されたにとどまらず四・二八において、戦后体制をプロレタリア的に突破せんとする我々と、右翼的に突破せんとするブルジョアジーの死斗

として展開され戦后体制の崩壊ののち、革命派がプロレタリア独裁をかちとるのか、それとも反革命の暴力的圧政を強いられるのかといった血みどろの歴史的総力対決の時代へ突入してゆくのである。

反戦高協第一回大会の第一の意義は、かかる情勢の中で、これを真に「歴史的激動期」の到来としてとらえたということである。すなわち、帝国主義戦后世界体制の根底的動揺とりわけ帝国主義アジア支配体制の崩壊的危機の中で、基地沖縄の軍事的地理的重要性はますます増している。従って日米両帝国主義は沖縄の軍事的分離支配をもってその要塞化された基地の維持をはかろうとしたのである。だが、B52墜落を契機にそうした矛盾は一気に爆発したのである。この沖縄問題を軸とする、安保粉砕・日帝打倒の永続的斗いの展開は、そもそも沖縄問題が日帝の矛盾の集中点であるが故の最弱の環であるということに対する我々の先行的な攻撃が沖縄のプロレタリア的奪還として開始されたことによって、必至のことであったのである。日本帝国主義打倒の道は、この沖縄奪還を導きの糸としなければならない。しかも主客にわたる条件がそう要求していたのである。第一回大会は、これを安保粉砕・日帝打倒・沖縄奪還をもって答えたのである。

反戦高協第一回大会の意義の第二は、かかる現代社会の時代的展開の中で、日本高校生運動の資質とは何か？　という問いに対してプロレタリア自己解放の一翼としての高校生運動、ということをもって答えたということである。すなわち前にも述べたように、四・二八沖縄奪還大斗争の中で顕在化した、沖縄問題の治安問題化を軸とする人民の内部における革命と反革命の分裂といった事態に対して、我々高校生は如何なる立場をとるのか、という問いに対して、断乎として革命派を名のるということをもって答えたのである。したがって我々反戦高協は、「四五〇万高校生のプロレタリア的獲得」を自己の任務として確立せねばならないことを第一回大会は明らかにしたのである。

反戦高協第一回大会の第三の意義は、その実践的試練の場である十一月決戦に向け、自己の任務・方針を明確に打ち固め、一切の態勢を整えたことの中にある。すなわち一つには今まさに爆発せんとした、掛西斗争を一大突破口に全国高校闘争を目的意識的に追求するということ、つまり「高校を安保粉砕・日帝打倒の砦とせよ！」を第一回大会は、高々と宣言したのである。昨秋、全国を燎原の火の如く燃え上った高校闘争は、こうした第一回大会での確認にもとづき、反戦高協の意識的な思想的・戦術的指導を受けて闘われたといっても過言ではない。もう一つには、こうした全国高校闘争を、我々反戦高協がヘゲモニーを掌握し、もって十一月決戦に「万余の高校生軍団をもって闘い抜けた組織的根拠は反戦高協第一回大会のメイン・スローガンであった「十一月決戦に万余の高校生軍団の登場を！」の中にあったのである。

かかる意味において反戦高協第一回全国大会は歴史的意義を獲得しえたのである。

第二節　全国高校斗争の爆発

「高校を安保粉砕・日帝打倒の砦とせよ！」といった第一回大会の大路線の下、全国高校闘争を目的意識的に追求したわれわれは、そ

の巨大な突破口として掛西闘争を全国的に打ち抜いたのである。八月三十一日、三〇〇名の白ヘル軍団を全国から結集したわれわれは、「大量処分撤回、十一月佐藤訪米阻止」を掲げて集会、デモを行ない、逆バリされた掛西校内に七名の英雄的学友が突入、占拠したのである。この掛西校内突入、占拠闘争に参加し、不当逮捕、長期拘留を受けた青山高校の反戦高協の同志に対して加えられたさまざまな弾圧を契機に、あの青高闘争が爆発したのである。ここに掛西闘争は、直接的・有機的に青高闘争に引き継がれたのである。

校長室占拠→校長室、クラスバリ→全学バリ封と二ケ月になんなんとする青高闘争は、たび重なる機動隊導入をもって日本帝国主義打倒へと主体の志向性を醸成していったのである。しかもそのことは、十一月決戦の幕を切って落した十・二一の闘いの中で直接的な突破口となった青高砦死守をもって「安保粉砕・日帝打倒」と増々わかちがたく結合していったのである。青高砦死守を闘うことを身をもって実現したわれわれは、全国高校闘争の管制高地を築くとともに、またそうすることによって、一六二校で爆発した高校闘争を領導していったのである。帝国主義教育として完成され、腐敗の極にたっしている教育にいたるところで反逆の烽火が燃え拡がった高校闘争は、内乱的死闘の時代を闘い抜く一大戦線として日本階級闘争に不動の地位を獲得していったのである。そのことは、去年の一〇・一〇の階層別集会において清水谷公園を数千の高校生で埋めつくすことによっても証明されたのである。

第三節　十一月決戦と反戦高協の果した役割

内乱的死闘の七〇年代の幕を切って落とした一〇・二一からの一ケ月の死闘に我々は勝利した。この十一月決戦勝利の核心の第一は、何よりも我々が日帝の沖縄「返還」のペテンを赤裸々に暴露してしまったということであり、したがって、沖縄「返還」をもってしては国民の階級的結集が不可能になったということが第二の核心である。第三の核心は、日帝既成左翼の体制内的獲得と革命的左翼の暴力的壊滅を意図していたにもかかわらず、我々は壊滅するどころか、既に決戦時以上の部隊に成長し、「七〇年型城内平和」の夢をむじひに打ち破り、荒々しい革命の息吹きが迫る内乱的死斗の七〇年代に突入したということであり、しかもそのことは「日米共同声明」において明示された沖縄「返還」準備過程＝七〇年～七二年までアジア危機へ命を賭けて「飛び込み」、アジア侵略体制を構築せんとする日帝と、それを拒否し、日帝を打倒する人民大衆との血で血を洗う死闘が展開されることは約束されているのである。

沖縄を「日本」へ「抱摂」することによって逆にアジア危機を内にはらんだ日帝と、これを打倒するためにいよいよ内乱的死闘に耐え抜く党を先頭に「七〇年こそ何かするぞ」といった主体の成熟を促進し日本の階級関係を大きく揺り動かした十一月決戦において、反戦高協が軍団を形成することによって高校生が、政治闘争の先頭に起ったということである。

過去のあらゆる例と異なり、我々高校生は最後まで独自の闘いを遂行してきたのである。更には、高校生の政治活動への参加が独自の軍団をもって行なわれたことに、全国津々浦々で爆発した高校闘争に一層の活力を与え、高校バリケードの常態化、そして「安保粉砕・日帝打倒」への大合流を克ちとったという中に、反戦高協が果

した第二の役割があるのである。

第四節　三里塚闘争と沖縄全軍労斗争

十二月十四日、事業認定が許可されていよいよ強制測量が開始されんとした三里塚闘争に、われわれ反戦高協は、全国から四五〇名の白ヘル軍団をもって結集し、彼我の注目を浴びたのである。八千余名の革命的左翼を結集して開かれた現地集会に過去のいかなる時よりも多い反対同盟七〇〇名の農民が決起したのである。

七〇年の幕は三里塚闘争をもって開かれた。すなわち、日帝の七〇年代路線、つまり「日米共同声明」を基礎に沖縄「返還」をもってアジア侵略体制の跳躍台とし、更に全土総基地化の攻撃としてあった三里塚軍事空港の建設は、「日米共同声明」の実質化の第一歩としてあった。しかもそれは、沖縄基地の再編・強化・維持を狙う沖縄全軍労の大量解雇の攻撃と同時に行なわれたのである。だがしかしわれわれ反戦高協は、全学連・反戦とともに現闘本部を開設し強制測量にそなえたのである。二月十九、二〇日両日、主に現闘本部を目標にした強制測量が行なわれ、われわれは急きょ行動隊を組織し強制測量を阻止せんとしたのである。三千の機動隊を背景に公団職員が測量にとりかからんとする中でわれわれは、団結小屋にスクラムをもって座り込み最後まで闘い抜いたのである。そしてついに航空写真にたよることを決定し、その政治的メンツすらかなぐり捨てて逃げていったのである。われわれは、「日米共同声明」＝アジア侵略体制構築の実質的第一弾に痛打を与え得たのである。又かかる闘いとして、二・四沖縄全軍労闘争支援の闘いを展開したのである。そしてこの闘いを通して「沖縄と三里塚は一体である。」ことを見抜いたわれわれは、沖縄と三里塚を七〇年斗争の両軸にすえたのである。

第五節　二・一一紀元節粉砕闘争

六七年・紀元節の復活として制定された二・一一建国記念日は、帝国主義教育と相まって、全人民へのブルジョワ・イデオロギー攻撃として展開されてきた。これに対して高校生の怒りは燃え広がり、七〇年二・一一闘争は、文字通り北は北海道から南は建国記念日が制定されていない沖縄に至るまで全国高校生統一行動として実現され、これに決起した高校生の量的拡大は東京三二〇〇名を先頭に全国で数万にのぼったのである。

七〇年二・一一闘争の第一の革命的意義は日米共同声明を基礎とした三里塚・沖縄にみられる日本軍事力の本格的建設を中軸としたアジア侵略体制構築という日帝の攻撃の新たな展開の中で、この紀元節を帝国主義イデオロギーの注入＝全人民への攻撃として捉え、高校生の手によって大打撃を与えることになったということである。そのことは、建国記念日が制定される段階でのあの異常な事態、制定委員会の超秘密主義的な対応、制定委員会から「良心的」委員の逃亡といったことが暴露されその本質が明らかになる中で、右往左往する支配階級は、最早我々を何ら説得するすべをもち合わせていなかったのである。

七〇年二・一一闘争の第一の革命的意義は、こうしたことが「同盟登校」とし、大衆的に展開されていったということであり、しかも今大会のメイン・テーマである「四・二八沖縄奪還高校ゼネストを実現せよ！」といったことの端緒としてこの同盟登校が実現されているということである。反戦高協中央書記局発行の討論資料を素材に連日のクラス討論クラス決議を先頭に堂々と学内において決起集会を実現してきたのである。従って我々はこの中で、「四・二八高校ゼネスト」を打ち抜く自信を大衆的に獲得してきたのである。

七〇年二・一一闘争の第三の革命的意義は、全国数万高校生を決起させる場を大担に保障していくため広範な統一戦線を構築し、しかもそれが、白ヘル高校生のヘゲモニーの下に展開されたということである。

全都高共闘(準)として東京において実現された統一戦線は、何よりも四・二八～六月安保決戦を全人民的な闘いとして展開せんとする我々の組織戦術であり、ノン・セクトと我々党派との悪しき関係を打ち破るものであった。（注意しなくてはならないことはこれらの悪しき関係が主要には、ノン・セクト諸君によって形成されているという点）すなわち、党派・ノン・セクトを問わず、四ー六月安保決戦へ向け全ての高校生が階級的緊張関係の中で強権的な弾圧の嵐にみまわれるであろうことは自明の理であり、にも拘わらずその中で四ー六月安保決戦へ向けた主客にわたる準備を行なわざるを得ない時、全ての高校生大衆に四・二八～六月決戦に決起する場を我々は、党派として大担に保証して行かねばならない。改めて繰り返すまでもなく、自己の党派としての運動方針を大衆的全人民的なものとして貫徹していくものこそ、我々の組織戦術であらねばならない。だとするならば、今日のML派・ブロ軍・社青同解放派諸君の全都全共闘(準)へのかかわり方は一体何なのか？「春季大攻勢」「日帝確立論」をもって四・二八～安保決戦に対する党派としての運動方針を、あいまいにしているML派諸君が如何に全都高共闘(準)の下部組織としての「地区共闘」を言々しようとまったく意味がないばかりか、組織に対する転倒した思考方法を生み出してさえいるだろう。又同じような意味で、ブロ軍高評の「地区評議会」なるものも、組織論のイロハから批判していかねばならない。そして、以上の党派(?)も含んで、社青同解放派諸君のような単純な囲い込み運動を行なわぬように同志的立場から糾弾する。ML派諸君・ブロ軍諸君！諸君らは地区共闘やら、地区評議会を言々する前に「まず四・二八ー六月安保決戦を高校戦線として如何に闘い抜くのかを真剣に討議すべきである。」と。

最后に、党派的関係の中では、地区共闘組織をデッチ上げ大衆の囲い込みを計り、しかもその過程で自己を党派として明らかにしないといった右翼的策動をはりめぐらしていた社青同解放派が、全都全共闘(準)等といった統一戦線の急速な拡大の中で全面的に屈服してきたのである。又、東大裁判闘争などで、「これは大量処理方式である」といって逃亡し、その左翼スターリニストとしての本質を暴露したML派との統一戦線内部における党派闘争を全面的に開始しなければならない。すなわち、第一回大会が、我々の路線として明らかにした「アジアを反帝、反スタ世界革命の根拠地」とするために中国スターリン主義と対決は不可避であり、その意味においてもML派の正体を暴露しなければならない。統一戦線内部の不動の主流派として、我々白ヘル反戦高協は大担に登場しなければならない。

第六節　卒業式闘争

二・一一紀元節粉砕闘争をもって明確に打ち出された全国卒闘反乱は、本全国大会に至るまで実に三五四校において爆発している。この七〇年卒闘のまず第一の革命的意義は、何よりも昨年春の卒闘が全国六九校において闘われたのに比べ、その約五倍三五四校において大爆発したという底辺における圧倒的な量的拡大を克ちとっているということである。このことは、昨秋全国高校闘争を受け継ぎ更に大衆をもって闘われた卒闘反乱は、バリケード封鎖闘争から「君ケ代」斉唱拒否、インター合唱と先鋭な方向をもちながら、尚かつ大きな広さを示しているのである。この戦術的多様性の中に第二の意義がある。更にこうしたことを創意工夫をもって実現するというその大衆性からして、綿密な準備と計画、広汎な思想的・戦術的討論がなされていたことの中に極めて政治的な組織性をみてとることができるのである。いわばこの政治的組織性の中に第三の意義があるのである。しかもこうした事例の中に、十一月決戦のあらゆる意味での成果の全人民的浸透がみられる中で高校生の中に卒闘という形態をもって浸透してきたということがみてとれるのである。

最后に、東京、私立武蔵高や愛知県下の卒闘でみられた、我々卒闘反乱を起さんとする部隊に対して、自己の教師としてのメンツをも捨てて武装した教師が登場したということに注目しておく必要があるのである。これ以上の暴力的圧制があるだろうか！

本来警察権力が果す役割を先頭に起って学校当局がおこなうといったことが平然と行なわれているところに、昨年の卒闘とは決定的な差異があるのである。我々はこうした反革命の暴力的弾圧に対しては、暴力の復権をもって教師に対する幻想を打ち破りつつ断乎として粉砕しなければいけない。

おわりに

以上展開してきたことを包括的にみるならば、第一回全国大会から第二回全国大会までの反戦高協運動の過程は、反戦高協自体が全国的な政治指導部として登場する過程であったといえる。高校生運動に全体的方針を唯一提起し、高校戦線を領導してきたのは、我々反戦高協だけである。だがこのことに甘んじている暇はまったくといってない。すなわち日帝の全面的政治危機の深化と帝国主義教育の腐敗ぶりは（このことの詳しい論証は、別の機会に譲るとして）高校生を増々政治闘争の先頭に決起させるに充分な条件を有しているからである。そのことは、既に七〇年卒闘が三五四校において展開されたという事例をみても明らかである。このようにして、ようやく開始された高校生運動の胎動は、いいしれぬ恐怖を支配階級に与えているのである。

さて「沖縄」の解決をめぐって帝国主義者労働者階級・人民大衆の全人民的激動が圧倒的な政治的高揚を生まんとし、それが六月安保決戦をもって爆発せんとしている。

現在、日帝の十一月佐藤訪米における政治的敗北を一方の基礎としつつ、他方においてアジア危機の破局的展開といった中で、日帝のこうした危機の表現である「日米共同声明」＝アジア侵略体制構築といった〃国家目標〃を我々は断乎粉砕しなければならない。しかもそのことは、今日、日帝とそのブルジョア政治委員会である佐藤内閣が、四・二八ー六月安保決戦の全人民的爆発を回避せんとして、四月私大ロックアウト、あるいは入管法の国会上提延期等といった中で、文字通り政府を全面的な政治危機へと吹き込むことが可能となっているのである。

こうしたことを前に、我々反戦高協は、いよいよ本格的な高校生運動の建設に着手しなければならぬ。十一月決戦の大衆的浸透の中で、断乎として決起せんとする高校生に対して、我々反戦高協は、高校生総体として政治闘争への登場を保証していかなければならない。すなわち、ドゴール体制の政治危機をつくり出しつつも、強固な政治指導部をもたなかった故に敗北した「フランス五月革命」を七〇年日本の四ー六月に実現するために、我々は高校戦線にも「政治指導部」を独自に建設せねばならない。

したがって高校生単独でも政権を打倒するといった七〇年型高校生運動の本格的建設を急務の課題とし、本大会はそれを成し遂げるであろうことを宣言するものである。

アジア革命の展望をきりひらく
待望の専門誌　ついに登場！

日本・朝鮮・中国

創刊号発売中　A5判　88ページ　200円

今日の朝鮮問題――高田隆志

特集　■入管体制粉砕の闘い
入管法粉砕のために――河本貞二
日韓条約から入管法へ――滝本洋一
破綻せる日朝友好運動(1)　梶田玲

書評「アリランの歌」――蒲原信彦
その他

川崎市小杉一ノ四〇三ゆり号五三一　青雲社気付
「日本・朝鮮・中国」編集委員会

情勢分析「日帝のアジア侵略の危機を内乱に転化せよ！」

報告　議長　木村　精一

はじめに

昨年十一月、日本帝国主義は内外にわたる戦後体制の矛盾の激化に規定されて、七十年代の危機のりきりの基本政策として「日米共同声明」をうちだしたのである。沖縄問題を逆用したきわめてペテン的なやり方を通して危機の時代に対応する日本帝国主義の、アジア侵略への積極的のりだしを核心的内容とする反動的エスカレーションをはかろうとしたのである。そして今日、我々が日帝のかかる反動的七十年代の路線に対し、沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒、日帝のアジア侵略の危機を内乱へというスローガンにあらわせる大路線を全人民のそれとして確定し、十一月決戦を受けつぎ、ますます六月安保・沖縄決戦の大衆的高揚の大波をつくりださんとしている現在、六月決戦の路線をより鮮明なものとして確立しなければならない。

日本帝国主義の動向

六月闘争の全人民的高揚の回避

六月決戦を結論的に一言でいうならば、沖縄奪還闘争＝アジア侵略宣言たる日米共同声明と真向から対決し、七十～七二年において、その実現過程を粉砕しアジア侵略基地沖縄を我々（日本人民）の手に奪取し、日本帝国主義の危機突破策を打ち砕いて、安保粉砕・日帝打倒の大流動をきりひらく、その中心的環が四・二八沖縄奪還闘争を突破口とする七十年六月安保決戦なのであるが、今日我々をとりまく一切の情勢の大きな流動の開始は、全人民的エネルギーを一点六月大闘争にしぼりきる可能根拠を主客にわたつて醸成しているのである。

十一月決戦后の敵階級の動向の特徴は、何よりもまず日帝による沖縄基地の維持、再編強化をテコとしたアジア、とりわけ南朝鮮に対するむき出しの侵略の本格的開始なのであるが、これらの事は我々の七十年代とりわけ七十～七二年への総路線＝侵略戦争を内乱へ＝沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒が全く正しいものであり、一切の闘いがこの路線の下に吸引され大合流する中で闘い抜かれていることを鮮明に証明するものであるのだが、しかし、我々が今日六月決戦の全人民的路線を確定するに際し、何よりもまず第一に確認しておかなければならないのは、敵階級＝日本帝国主義が六月における沖縄＝安保闘争の全人民的激動の大爆発を極度に恐れ、それをいかに回避し、おさえ込むかという一点に焦点を合わせているということである。日本帝国主義の必死の巻き返しとも言うべきものの第一は（これは日帝にとって最も重要なものであるが）〃沖縄「返還」〃があたかも実現したかのように見せながら、全て「沖縄返還」のためと語ることによって人民をたぶらかしつつ、沖縄の現実を固定化し（美化さえ行ない）、現実のアジア侵略の基地としての沖縄を本土へ包摂し安保＝防衛政策をエスカレートさせることである。第二に自衛隊の帝国主義軍隊化、第三にナショナリズム＝排外主義的イデオロギーの高揚による侵略の美化ー人民の侵略への動員を実現しようとしているのであるが（これら全ての巻き返し策は、次々と破綻をきたしているのである）より直接的に日帝の六月危機回避策の第一は、国会操作である。出入国管理法案国会提出断念等いわゆる粉争懸案を引きおろして今国会における野党との対決の軸を解消させ、あるいは言論・出版論議・スポーツ問題を積極的に放置、指導することによって対決軸を横すべりさせるという国会操作により民衆の六月大闘争への決起をなしくずし的に防止しようというものである。今国会は五月下旬までの臨時国会であるが、昨年の第六十二国会が、安保、沖縄、健保、大学処置法等を中心に強行採決の連続であったのと比較すれば今国会ほど主要法案のない国会はまれである。入管法案は、戦后一貫して、六十万在日朝鮮人を暗黒と弾圧・苦悶の中に陥し入れてきた入国管理令をさらに一層反動的なものにしようとするものであり、日帝が最重要法案として提出するたびに拒否されてきたきわめつきの反動治安立法である。日米共同声明後アジア、特に朝鮮侵略の意図を露骨に表明している日帝にとってそれは絶対不可欠なものなのだが、にもかかわらず、その提出は国会での野党との対決のみならず六十万在日朝鮮人の日帝打倒の闘いの激発を不可避とし、それを導火線として六月の全人民的激動に相乗的効果をもたらすというジレンマの中で、佐藤は後者を回避しようとしたのである（と言っても佐藤は在日朝鮮人弾圧政策を緩和したのでは全くなく、実質的には強めているのである。）今国会で見送りとなったもうひとつの重要法案である教頭の地位明確化法案＝学校教育法改正案（これは今まで三回提出されていずれも不成立）も教育系の反動的整備の最終段階として、日帝にとって不可欠なものであることはいうまでもないのであるが、提出ー強行採決により全人民の怒りをよびおこすよりは、未提出ー混乱なしの方を選ぶというのだ。

これが十二月選挙で三百議席を確保し、その「圧倒的勝利」にほ

、そえんだ佐藤の六月のりきり策なのであり、日帝は全く自信を喪失し、六月までなんとか国会に於ける対決を回避しようというのだ。

もともと議会政治なるものは、議会で予算や政策が決定されるものではなく、行政機関が作成し、時にはすでに執行した行動表を追認的に採決するだけのものであるが、にもかゝわらず、外交上の重要決定や立法処置に関しては議会通過を必要とすることから、野党の有形無形の協力とそれに対する代償としての譲歩とかが具体的問題となるのであり、それがまた野党の存在理由のうちには改良的副産物を期待する傾向を生み出す原因となったのである。かくして帝国主義国家権力は、買収と懐柔、どうかつと妥協をもって野党の協力をとりつけながら議会運営を維持し、自己の階級的利害に共同体幻想を付与する議会制手続きをたえず遂行してきたのである。

しかし、日米共同声明を不可避とした日帝の体制的危機の深まりを議会の無力化、無内容化＝「右からの破壊」を一つの重要な柱として乗り切らんとする日帝は、それによって促進された野党の一挙的後退を勝ち取りながらも逆に棄権という形をとってあらわれる人民大衆の議会＝街頭政治闘争への浸透的傾斜（これこそ革共運動十年間、とりわけ六七年から二ケ年の斗いによってひきおこされた伝統的階級闘争の構図の「左からの」破壊の結果に他ならない）に対して徹底した危機意識をもつのである。しかもこれらの広汎な民衆は、七十年六月は安保をめぐる歴史的決戦であると信じている以上、ほんのさゝいな紛議、契機が思わぬ大破局をもたらすかも知れない、ということを予知し得ているのは我々と日帝だけなのである。

日帝の六月の全人民的激動の反動的回避策の第二は、社民に対する徹底した攻撃＝屈服要求である。かゝる日帝の政策はすでに総選挙の過程からはっきりとした形をとってあらわされてくるのであるが、社会党の惨敗という中で、一方ではブルジョアマスコミを動員しての徹底した社会党攻撃と、他方では鉄鋼労連等の右派を煽動して総評の右からの分解を促進させることにより、六月以前的にその戦闘体制をガタガタにつき崩さんとしていることである。

もともと社民とは労働者の日常的な資本への直接的な反逆を階級形成にまで高めないで、反働的に固定化するものであり、帝国主義の植民地支配の収奪の一部を付与されることにより発生、成立するものであり、その成立根拠を帝国主義においている。それ故に社民は一貫して労働貴族化する傾向をもつと同時に帝国主義の体制的危機の深まりの中では、社民は当然のこととして没落せざるを得ないのであるが、にもかゝわらず日本に於ては日本型社民ともよばれるその戦闘性は特に下部労働者に根強く残存しており、それに依拠し、それを導火線として大衆が政治闘争に決起してゆくという構造をもっているのである。

六月を目前にして、それ故日帝は何としてでも労働組合をはじめ、あらゆる機構を通して労働者人民の掌握をはかろうと腐心するのである。社会党、総評は、この日帝の攻撃に耐えきれず、彼ら社民は議会主義的野党としての凋落を自民党への驚くべき屈服妥協によって克服できるかのように錯覚し、民社党顔負けの協力体制をしいているというていたらくである。

日帝の六月全人民的激動への第三の回避策は、革命的学生運動に象徴される革命的左翼と民衆との接触、大合流を阻止することであり、なかんずくその中で特殊な危険として他と区別される中核派と赤軍派に対する執拗な弾圧をいささかもゆるめず、機動隊強化、自

衛隊治安出動の準備を相変らずのピッチで進めているのである。

特に日大生中村君虐殺に端的にみられる如く、弾圧の質は飛躍的にエスカレートしており、ビラまき（大衆との末端における接点）さえも許すことができない程敵はその合流に恐怖している。しかも誰が見ても極めて計画的に右翼――国家意志の直接的人格的表現――を使用しての虐殺を「事故死」にデッチあげ、襲撃した右翼を放置しおそわれた日大全共闘の学友を逮捕、起訴し、あまつさえ一労働者にその罪をなすりつけて、中村君も虐殺をなしくずし的に葬り去ろうとしているのだ。我々はこうした右翼－権力一体となった弾圧を絶対許すことはできないし、このかたきを断乎としてはたさずにはおかないだろう。日大殺人体制を粉砕せよ！

又すでに日帝は私大協を動かし、四月初頭から四・二八まで、早稲田、立教をはじめとする私立大のロック・アウトを宣言し、新入生との合流を政治的に阻止し、学生運動を封殺せんとしているのであり、かかる動向は早晩国大協にも波及するであろう。

又反戦派に対しては「春闘対策」を基本的に「反戦対策」に移し、十月に築いた各工場の自衛体制、逆バリケードをそのまま堅持しており、さらに我々高校生に対しては、「学警協力」の強化、処分、「教師の武装」、親を使ってのしめつけをはかり我々の政治闘争、学園闘争への決起を阻止せんとしているのである。

以上三点からしてもはっきりと確認できるように、「七〇年は終った」「六月には何も起らない」という主観的気休めは、支配階級においてまず拒絶されているのであり、敵の様々な回避策が、十一月決戦の全人民的激動と六月安保決戦の爆発的高揚の不可避性に対して打ち出されていることを我々はまず第一に確認しておこう。

2. 日帝の回避政策をもたらしたもの

我々が今日、六月決戦の全人民的激動への路線を確定するに際して第二に確認しておかなければならないことは、かゝる日帝の異常なまでの緊張ぶりは、日帝の十一月にかけたものの破綻によりもたらされたのであり、日米共同声明によって沖縄を内包し、それによってアジア危機――とりわけインドネシア危機と朝鮮危機を日帝の問題として取り込んでしまったこと、さらに加えて、こうしたアジア危機に立ち向う日帝の日米共同声明による侵略体制構築が決して「スムーズ」にはできない、ということの危機意識をその根拠としていることである。

すでに明らかにされていることであるが（「前進」新年号・四七〇号）、日帝はその基本的存立条件たる「アジア平和」（帝国主義アジア支配体制の確立）と日米関係（帝国主義同盟）が、アジア危機とドル危機に基く戦後世界体制の根底的動揺によってガタガタになっていることと、さらに日帝自身の発展の段階とそれに規定された国内諸矛盾の激化（階級関係の非和解化）という内外にわたる重圧による危機の到来に対して、日米同盟（これは日帝にとっては世界政策）のあり方の大編成を企画したのである。

それは基本的には第一に、ヴェトナム危機がアジア全域（インドシナ危機への拡大はもちろんインドから朝鮮に渡って）に拡大する勢いにもかゝわらず、米帝の危機による帝国主義アジア支配の決定的後退の訪れに対し、日帝の力を動員すること、第二にこのアジア

危機の深化がアジア支配の軍事的要である沖縄の維持を困難とさせており、又同時に日帝の支配政策上の弱点（単に沖縄県民に対してだけでなく本土人民にとっても）となっているこの沖縄の基地としての維持をかち取ること、第三に沖縄のベテン的解決をテコとしながら、日本階級関係の全面的整備によって日米安保における国内的諸制約のとりはらいを確立し、アジア侵略戦争体制に国内全体を動員することにあったのである。敵の十一月にかけたものは「沖縄問題の逆用と革命的左翼の運動を押しつぶすことにより日帝のアジア侵略体制構築を七二年までになさんとするものであったのであるが、しかし、十一月は一方においては日米関係におけるとりひき（密約があったことは一層はっきりとしてきている）によって、日帝のアジアへの動員体制への移行が強行的になされる手筈になりながら（そのことによって「七二年」「沖縄返還」が声明に盛り込まれた）、他方においては「返還」の大事業達成をテコとする沖縄ー本土人民の総結集＝城内平和（むろん行政ボナパルテイズムに基づくゲワルト的圧力の強化を軸として）は破棄してしまったのである。

それは、日帝にとっては「七二年」という時間的限定のもとで、ベトナム及び朝鮮を含むアジアの再平定と直結された「沖縄返還」（即ち日帝の責任における秩序ある沖縄基地の維持を中軸とし、確実なアジア危機に対処しうる日本国内の政治的軍事的態勢の確立を含む、殆んど全面的な、いわゆる「全土総基地化」「政治的臨戦態勢化」の展開）を仕上げることを強制するものであるがしかし、沖縄百万県民の反戦復帰の闘いと沖縄奪還の闘いとしての十一月の激烈な闘いと、その全人民的波及の下で、それをなしとげねばならないという、内外の万力の如き重圧に日帝が組みこまれたということなのである。

かくして、「安保、沖縄」問題を通じて、日本危機が世界危機に包摂されるのに対し、本土ー沖縄を貫く労働者階級＝人民大衆がますます対立することにより日本危機は本格的動乱へと発展する基本的構図をつくり出している。

かかる前提的認識の上で、十一月決戦後の日本帝国主義者の異状なまでの緊張ぶりをもたらした日帝の危機の第一はアジア危機とりわけ朝鮮危機の爆発（＝第二次朝鮮戦争の勃発）の緊迫性である。

戦後の帝国主義の後進国・半植民地支配体制の危機、なかんずくアジアに於いては今日きわめて激しい様相をおびたものとなっている。第一は、戦後の後進国・半植民地支配体制の政治的＝軍事的支えとなっている軍事基地＝分割国家における矛盾の爆発としてあり、第二には、戦後とにかくも独立をかち取ったといわれる国々、いわゆるA・A諸国における、経済危機の爆発であり、それにともなう政治的激動である。これら二つのあらわれは決して別々のものではなく、戦後における植民地体制の崩壊として手放しで論じられてきたことがらの暗黒面の爆発的露呈なのである。

アジアは一貫して世界危機の焦点としての性格を保持し続け、戦後世界体制の最も構造的に脆弱な地域をなしているが、このような構造的脆弱性を歴史的に規定している最大の要因は、日本帝国主義の第二次大戦における伝統的アジア植民地支配体制の暴力的破壊と、日帝の軍事的敗北、戦後危機の到来にもとづくアジアにおける帝国主義支配力の空白化にあった。この支配の空白化は帝国主義的宗主国自身が前革命的情勢におびやかされ、帝国主義自身の再建に全力をかたむけざるを得なかったこととあわせて、反植民地主義・民族

独立の闘いを決定的に促進したのである。こうした反帝民族解放のたたかいの主軸をなしたものこそ、中国革命の高揚であり、インドシナ＝ヴェトナムにおける解放闘争の発展であったが、その周囲に各国の武装解放闘争の波が渦巻き、さらには、民族ブルジョアジー（スカルノ・ネール）を先頭とする独立運動も吸収されるという情勢が生まれていたのである。もちろんインド、インドネシアにおける民族ブルジョアジーの独立運動なるものは反帝民族解放を目指すものではなく、旧宗主帝国主義と反帝民族解放闘争の均衡のうえにボナパルト的支配（政治的独立と金融的従属）を確立しようとしたものであったが、にもかかわらず、こうした中間主義的傾向も含めて伝統的植民地支配体制を根底からゆるがすたたかいの炎が燎原の火の如くもえひろがったのである。しかも、日本帝国主義の三六年間の植民地支配に苦吟した朝鮮においては、ヤルタ協定にもとずいて朝鮮の国連信託統治・南北分割の暴圧が連合国から加えられ、これに対して朝鮮民族の存亡をかけた反撃が全半島をおゝったのである。アメリカ帝国主義を盟主とする国際帝国主義は、西欧の経済的破局と前革命情勢に対しマーシャル・プランを基軸としてかろうじてのりきる見通しをえたのであったが、他方第二次世界大戦のもう一つの決戦場であったアジアに於て文字どおり帝国主義植民地支配体制の全面的崩壊に直面したのである。こうした事態に直面したアメリカ帝国主義は朝鮮戦争、インドネシア戦争を基軸としてロール・バックを開始されたのであるが、その焦点としたところのものは、朝鮮を基軸とした超軍事的な帝国主義アジア支配体制構築のためのきわめて狂暴な攻撃であった。即ち、帝国主義的必臓部における戦後革命敗北の確定＝帝国主義的再建は、植民地体制の根底的破壊を食いとめ、アメリカ帝国主義を中心軸として英仏がそれを補完するという形態で、戦後の後進国・半植民地支配体制（いわゆる新植民地体制）が不安定ながら形成されたのである。即ち、アメリカ帝国主義がアジアにおける分割軍事基地国家支配を軸にして、全世界の後進国・半植民地体制全体を軍事的政治的に威圧するという条件の下で、アジアにおいては、アメリカ帝国主義がインド・西アジアから莫大な利益をあげ、イギリス帝国主義がマレー半島に権益を確保したのであり、アフリカにおいては、イギリス・フランス両帝国主義がさまざまな形態で植民地主義的権益を残存させ、アメリカ帝国がいくつかの天然資源を手におさめたのであり、ラテン・アメリカ諸国はほぼアメリカ帝国主義の従属としておさえつづけられたのである。つまり一言でいえば、いくつかの分割基地国家・半植民地国家の支配を軸にしつつ独立した後進国をも金融的に決定的にしばりつけるというかたちをつくりあげられたのである。だがこの新植民地体制は全く不安定なものであったのであり、最初に述べたように、今日すでに二つの方向を取ってその矛盾を危機的に爆発させるに至っている。

第一の矛盾は、いわゆる独立をかちとったA・A諸国の経済的危機の尖鋭化としてあらわれている。これらの国々は工業化を唱えたが、だがしかしそこには絶対的限度があった。土地改革の拒否によってさらにその困難は過重された。だが、そのためには〃自力更生〃的には農業からの収奪以外に道はない。しかも戦後における世界貿易の発展が帝国主義国家間の貿易に異常に大きい比重をおいたものであり、そのうえ歴史的技術革新の結果、原材料資源の構造が大きく変化したため、一次産品貿易は大攻撃をうけ、後進国は世界経済

の発展から半脱落状態に陥入ってしまったのであり、このためドル保有であらわされる外貨事情はつねに危機的様相を呈している国を多く生みだしていったのである。こうした困難からの一つの脱出口として、いわゆる非同盟的態度をとることによって両体制から〝援助〟をひきだすネール・ナセル方式がとられるのであるが、だがしかし、かゝる方式はインド等に典型的に示されるように、国際帝国主義（インド債権国会議）、特にアメリカ帝国主義の金融的従属国に決定的に変化させるものでしかなかった。このように一方では農民から収奪し、他方では国際帝国主義の金融的収奪にさらされるという構造は、総じて一定の工業化を促進しつつも、農業の崩壊的危機をいたるところで激化させたのである。五〇年代後半期に、EECを軸として復興した西欧帝国主義とは逆に、政治的・経済的動揺を激発させたアジア諸国に対し、アメリカ帝国主義は世後体制の盟主としていわゆる後進国援助を開始したのであるが、だが、その援助は、一方では剰余農差物の輸出によってアジア諸国の農業危機をさらに促進するだけであったし、他方ドル資金援助も、アジア諸国の対西欧貿易の支払いに使用され、あるいは援助資金の利息に用いられるというありさまであり、しかも六〇年代前半から顕著になったドル危機によって援助資金さえもが激減するという事態に至って、南北問題という形をとってあらわれるアジア支配秩序の政治的＝経済的動揺は一層その度合をましていったのである。

戦後の後進国・半植民地支配体制の矛盾の第二の爆発は、アメリカ帝国主義の支配下にある分割軍事基地国家における矛盾の爆発である。アメリカのアジア支配体制は政治的軍事的性格がつよく経済的にはかっての帝国主義的宗主国とその植民地との間にあったような緊密な結合や循環性をもたず極めて奇型的な性格をつよくもったものであり、とくに三つの分割国家（南ヴェトナム・台湾・南朝鮮）の場合それは決定的であり、とりわけ、アメリカ帝国主義のヴェトナム侵略戦争の敗勢はアジア支配体制の全面的崩壊の導火線となっている。

もともとヴェトナム問題は、直接的には日本占領軍からの解放闘争の過程で達成された土地改革を戦後復帰したフランス帝国主義と、及びその後継者としてのアメリカ帝国主義が地主階級と結合して反動的転覆を行ったことを基礎としているが、ジュネーブ的解決にもとづく民族分割の必然的な結果としてその矛盾が南ヴェトナムに於て集中的爆発したところにその独自的性格がある。ドル危機にあらわされる帝国主義の体制的危機の深まりは、インド・インドネシアなどの「民族国家」における矛盾の爆発と反動的再編を必然化しているが、南ヴェトナムを頂点とした「反共軍事国家」の激動は、帝国主義の体制的危機の深まりにもとづく植民地支配体制の反動的再編を現実的な媒介項として、植民地・後進国の矛盾を一つのものに結びつけはじめている。民族解放戦線がヴェトナム問題をどう理解していようと、ヴェトナム危機は「世界帝国主義の体制的危機の爆発点に転化しているのであり、それ故、アメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争は、戦後のアジア支配体制を何としてでも防衛するものとしてあらわれてくる。

ヴェトナムにおけるアメリカ帝国主義の軍事的＝政治的敗勢は、もはや誰の目にとっても疑う余地のないものとなった。世界の専制君主としてアジアに君臨してきたアメリカ帝国主義はヴェトナム人民の英雄的抵抗闘争の発展、これと呼応した国際的反戦闘争の高まりの方向、そして国際通貨危機として進行する帝国主義戦後世界体制の根底的動揺の深まりの前に史上最初の敗北の危機に直面しているのである。すでに六八年三月三十一日、ジョンソン大統領の特別声明というかたちをとってヴェトナム侵略戦争の行きづまりを自己暴露したアメリカ帝国主義は、北爆停止を代償として北ヴェトナム政府を和平交渉のテーブルにひき出し、ソ連スターリン主義官僚の援助のもとに再度のジュネーブ会談的解決をもって南ヴェトナムに米帝の支配権を維持し、あわせて、戦争遂行にもとずく軍事的＝経済的負担を軽減しようとする野望をしめしたのである。だがしかしジュネーブ型解決の困難化＝パリ会談の行きづまりと、それ以後の情勢の推移は、アメリカ帝国主義の強盗的野望をみごとにうちくだき、ヴェトナム全域からの米帝の敗退という深刻な事態まで具体的日程表にのぼらせているのである。しかもアメリカ帝国主義のヴェトナム支配の破綻は南朝鮮・タイ・台湾・フィリッピン・マレーシア・シンガポール・インドネシア・パキスタン・ビルマ・インドなどアジア諸国全体に新たな国内的動揺の深刻化として波及しており（フィリッピンの学生運動・マレーシアの民族問題・パキスタンの大統領辞任・ラオスの内戦の激発等々）、アジアにおける帝国主義支配体制の全面的崩壊の危機を再び醸成しているのである。

これまでふれてきた後進国・半植民地体制の崩壊的危機は、今やヴェトナム危機の全アジア危機への拡大、とりわけ朝鮮危機への暴力的推進として急速に発展しつつある。

今日、朝鮮半島は、ヴェトナムに次いで軍事的緊張が激しい地点であることを、我々ははっきりと確認しておかねばならない。朝鮮半島の軍事的緊張を昂めている第一の要因はきわめて軍事的性格をもった米帝の朝鮮攻略にある。戦後アメリカ帝国主義のアジア支配が、ソ連スターリン主義との間での軍事的世界分割の基礎のうちに成立したものであり（ヤルタ体制）その後の冷戦体制のもとでの軍事的緊張のもとで、それを逆用しつつ世界的支配を貫徹してきたのであったが、朝鮮半島に於ては戦後の帝国主義的支配の崩壊的危機を、米帝が朝鮮戦争に巨大な軍事力を投入し南朝鮮を奇型的な軍事基地国家にしたてあげることによって支え、その帝国主義的新植民地的支配を維持してきた。以来、南朝鮮は分割国家（反共軍事基地国家）として政治的にも経済的にも極度に不安定な状態を固定化させられてきたのであるが、かかるもとで常態化した国内的危機は、一方では「力の均衡地帯」（自由主義のショーウインドー）として朝鮮半島を重視するアメリカ帝国主義の世界政策に助けられ、他方では朝鮮戦争の過程で奇型的なまま軍事化された反動的国内的支配の貫徹によって、さらに決定的には、それらをうちやぶる真に革命的な指導部をもちえなかったが故に、革命的突破の方向を閉ざされてきたのである。しかし現在、もっとも忠実なヴェトナム参戦国家としてヴェトナム景気の恩恵に大きく浴してきた朴政権が、アメリカ帝国主義のヴェトナムにおける敗勢の最も直接的で決定的な「被害者」とならなければならないのはもはや歴史の宿命である。ヴェトナムだけでさえ手におえなくなっているアメリカ帝国主義が、ヴェトナム以上に全面戦争化の危機をはらんだ朝鮮半島に対し、あえてプエブロ事件や、偵察飛行あるいはフォーカス・レチナ作戦にみられる軍事的挑発政策を強め、その結果うみ出された軍事的緊張を利用することによってしか朴政権を維持することができなくなっているところに、今日の朝鮮危機の第一の要因があるのである。第

二の要因は、いうまでもなく南朝鮮における異常なまでもの経済的、政治的危機の深刻さである。報道機関の流す「繁栄する韓国とはうらはらに、その現実は「〃高度成長〃」を名目にした買弁化政策ー無謀な外資導入に寄食し、消費部門に依存した独・寡占・特恵財閥の肥大ー及び七〇年以降の外貨危機ー外資導入・外援の低下に対する外貨償還額の増大」ということ以外の何ものでもなく、日本資本をはじめとする外国資本の無政府的流入がそれでなくとも国民経済的基礎の弱体な韓国経済の植民地的体質を更に一層激しくし、韓国経済は増々政府の手を離れて外国資本の意のままに動かされ、物価は無制限に高騰を続け農村を崩壊的危機に追いやり、都市住民の生活を破壊し、政府権力の外国資本との結びつきの強まりは、政府支配階級を増々国民から切り離し、腐敗を激化させている。

朴政権は、増々軍事的冒険助政策を強め、アメリカ帝国主義を韓国につなぎとめ、「共産主義」への憎しみをただかきたてていることによってその支配を維持しつづけようとしており、このような韓国内の危機の異常な深まりと朴政権の腐敗した反動的対応、今日の朝鮮危機の軍事的緊張の異常な高まりの第二の要因となっているのである。第三の要因として、我々は北朝鮮（朝鮮人民民主々義共和国）スターリン主義政権のこの帝国主義の危機に対する徹頭徹尾「一国社会主義的」現状維持的対応の反動性をあげなければならない戦後世界体制をスタリン主義の立場を肯定しアメリカ帝国主義に対して「朝鮮民主主義人民共和国」を対置し、この主権国家としての立場を軍事力をもって防衛するというのではアメリカ帝国主義の不当を訴えることにはなってもアメリカ帝国主義が良心に従って朝鮮から手を引くという全く非現実的事態を予想する以外、この軍事的緊張を根本的に解決する道はなく、このような軍事的対応は逆にそれ自身が軍事的緊張を増す要因にならざるをえないのである。かかる軍事的緊張は、南朝鮮人民の朴政権に対する反乱を導火線として第二次朝鮮戦争の勃発を不可避としており（七一年の朝鮮大統領選は、この決定的な契機になる可能性が十分にある）この危機が在日朝鮮人と革命的左翼によって日本の政治危機・内乱的危機に連動し、しかも朝鮮の崩壊が戦後世界体制のなだれをうった互壊につながることを、従って世界革命の現実性、直観的に日米帝国主義は見抜いているのである。朝鮮危機の爆発とその日本危機への連動性は、これに対し、日本帝国主義は日米共同声明と今国会の佐藤・愛知・高辻らの答弁に見られるむき出しの侵略的意図によって応えようとしている。即ち、共同声明の冒頭で「総理大臣は、朝鮮半島の平和維持のための国際連合の努力を高く評価し、極東の安全は日本自身の安全にとって緊要であると述べたのであり、二月二三日国会答弁で佐藤は「国連が侵略だと認める場合は（事前協議でイエスを与えることは）問題がないと思う。国連が（侵略と）認める以前にも、侵略状態が起きているかもしれない。その時には時機を失せず対処することが必要だ」と答えている。このことは朝鮮半島に、いったん事が起きた際には、日本の基地からの米軍の戦闘作戦行動を全面的に認め、支援し、それに対して日本の米軍基地が報復攻撃を受けた場合は「相手方が我国に対し武力的な侵略をしたことになる」（愛知）から「自衛権の発動は当然」（愛知）だという。すなわち「韓国」が戦争を始めれば全く自動的に直接的に日本は戦争状態に入るということなのだ。

日帝は侵略を「国連」をかつぎ出すことによって正当化しようと

しているのだが、そもそも国連とは、第二次世界大戦後の世界体制が、①帝国主義本国における戦後革命を制圧し②植民地人民の民族解放闘争を帝国主義的戦後処理のうちに収容し③ソ連スターリン主義の影響力に対抗する軍事的＝政治的体制を構築することを通して④アメリカ帝国主義を基軸としたものであり、かかる体制をスターリン主義者がヤルタ会談において帝国主義に屈服してゆく中で積極的に承認することを通して成立した戦後世界体制を物質的基盤として、ソ連をも巻きこむ一般的集団安保体制として成立したのであり、その成立の端緒からアメリカのための「国際投票機関なのであり、アメリカ帝国主義の世界政策の実行を追認的に承認するもの以外ではないのである。しかも朝鮮における「国連軍」とはとりもなおさず米軍なのであって、米軍が侵略と認識すれば、国連軍がそう認定したことになる。

さらに三月三日の国会答弁では、「朝鮮で紛争が起り、日本人の生命・財産が危険になった時、韓国政府から出てきて守ってくれといわれた場合」「自衛官が部隊を形成せず、専門家（一体何の？「として参加することは（憲法上）許される」「もっぱら平和処理をするなら話は別だ。憲法の禁止にふれない」高辻）とまで言い切り、自衛官の南朝鮮への派遣は、法解釈上は許されるとの立場を明らかにしている。これら一連の国会答弁にみられる朝鮮侵略への露骨な意図は、七一年秋の朴三選に伴うであろう朝鮮危機がアジア危機の重大なる転換点になることへの恐怖であり又、日帝の朝鮮保護領意識のむき出しの表明でもあるのだが、しかし、朝鮮を日帝内へとり込むことによって南朝鮮の階級闘争が日帝への直接的打撃力となることへの恐怖に対する反人民的対応なのである。

こうした南朝鮮への侵略にみられる日帝のアジア侵略は、①アジアに於けるアメリカ体制の崩壊は、戦後日帝の世界史的特質からしてこれを放置することはできないという関係を成立させているのであり、したがってそれは防衛的なものであるが、それ以外にはないという意味では不可避的に積極的・攻勢的質をもったものとならざるを得ないこと。②日帝の戦後発展が、いわゆる高度成長のゆきづまりということを基本軸にして内側からゆるぎ始め、インフレの危機、「労働力不足」、都市問題といった諸矛盾を顕現しているのであって、先進国・後進国植民地への対外膨張にともなう諸困難と相俟って、日帝独自の資本進出の圧力を強めていること、そして、③国内階級闘争の十一月決戦を頂点とする激動的発展に供なう、安保問題の治安問題化に直接に規定され、根本的には戦後世界体制の崩壊的危機に規定されつつ、日帝は帝国主義としての政治・軍事体制の抜本的強化を企図せんとしていること、という諸要因は、日帝の政治的・軍事的・経済的・イデオロギー的な内的衝動として日帝をしてアジア侵略の道に駆りたてざる得ないーこのことを基底にしっかりと把えておく必要がある。

より具体的には、先にもふれたように、①アジア侵略のための最大基地たる沖縄を反人民的にかかえこみ、②日帝の自衛隊を米帝軍隊の補助部隊として、しかし徹底的に強化し、日米アジア侵略体制の中核的位置を与え、③日米共同声明や、七二年沖縄「返還」などを反動的テコにした帝国主義的イデオロギー攻撃を全面的に加えんとする、という攻撃として一つ一つに文字通り体制の重みをかけてきているのである。

日本帝国主義の異常なまでの緊張ぶりをもたらした危機の第二は、

沖縄「解決」のペテン性の一層の解明化であり、それに対する沖縄ー本土人民の怒りが飛躍的に拡大することによって、日帝が何一つとして国民総合政策（城内平和）をもてなくなったことである。

七二年施政権返還を前に、在アジア米軍の再編強化（断じて撤退などではない！）が進み、大量輸送技術を生かした全アジア兵力展開体制の要として沖縄基地への全権力の集中が発表されている。チャップマン米海兵隊司令官は、三月十二日沖縄の「現状機能は半永久的に維持される」と語り、①ベトナムからの撤退米軍によって沖縄で海兵隊緊急派遣部隊が編成され、②その数と応戦能力は以前より増大しており、③いつでもベトナム（アジア全域に）出動できる体制であって、④日本全土、アジア各地からの米軍基地を〝縮少〟し全て沖縄に集中する、という「拠点集中（＝沖縄）柔軟反応戦略」をうちだしており、同日リーサ米陸軍長官も「沖縄を補給中枢基地とし、大平洋地域全体の防衛の要として沖縄を維持する」ことを言明している。七二年「返還」の内実は日帝が先頭に立ってこのような沖縄に全アジアにまたがる軍事的機能の一切を集中し、基地沖縄の再編・強化を急速に行うことに他ならないのである。

このことのもつ意味は、極めて重大である即ち日帝が沖縄「返還」を愛想よくふりまけばふりまく程、沖縄のこの反人民的現実は、全人民の前に浮び出てくるのであり、このことによって、第一に、日帝と米帝との間に「密約」（＝沖縄を日帝が包摂することにより完全に、米軍の自由使用、事前協議制の意味化を認める）があったことをうらがきし、第二に、沖縄「解決」のペテン性・即ち「返還」過程の反人民的展開が、現実のものとなってゆくからである。そしてこれらのことの意味するものは、更に重大である。即ちそれは、最近とくに深まりゆくアジア危機の進行に規定されて日本帝国主義は「沖縄返還」を完全に遂行することは全く不可能であることを示している。米帝のヴエトナムからの敗勢にともなってうち出されてきた、ニクソンのグアムドクトリン、いわゆる「ヴエトナム化」ー（これさえ現在破産している）が、たちどころにラオス・カンボジア・フイリピン・タイ・朝鮮にまで戦火と政治的＝経済的動揺を拡大させている今日、日帝を動員した米帝の必死の巻き返しは、沖縄のアジア侵略基地としての位置を低めるどころか、一層のエスカレーションをもたらしている。だから日帝のなしえることは、七二年施政権返還時までに拡大された沖縄基地を徹底して維持しうる返還形態を反人民的かつ、絶望的攻撃を繰り返すなかで模索することなのである。

いうまでもなく基地沖縄はアジア侵略の基地としてきた戦後・後進国・半植民地支配体制の中心的要をなしてきたものであるが、それは、日帝が米帝の沖縄分離支配を積極的に承認することによって維持されてきたものである。だから今日、沖縄ー本土を貫く闘いによって七二年返還（分離支配の停止）をまがりなりにも打ち出さざる得なくなった日帝は、その「返還」準備過程を、(1)沖縄「返還」問題を逆用して、アジア侵略の道を屈折的にはき清めんとする態度を基底にすえて、(2)そこから日帝は、今日アメリカ帝国主義がドラスチックに展開している「返還」準備の反人民的諸攻撃を、いまだ日本が主権者ではないことを口実にそれを放置し、七二年「返還」時において人民の生活も権力も最底に破壊され尽していることを自己の利益としている。そうして何よりも「復帰」運動として結集してきた巨大なエネルギーがガタガタになり分解、分散しさるこ

と、そして反戦、反安保、反基地の闘いが基地の島沖縄を再びゆるがすことがないようにしようとしていること、(3)日帝は、沖縄防衛の責任を強調し、しかもそれを、今まで異民族の下に放り出してきたことに対するつぐないであるかのようにいいなしている。いわば、民族の責任といったイデオロギー攻撃をかけ、自衛隊の軍隊として国民的承認のための宣伝道具にしてきているのである。(4)さらに、日帝は「返還」に備えて、「本土並み」体制への移行として諸制度の準備を行い、警察制度の強化をはじめ、弾圧体制の強化、人民の既得権の剝奪の攻撃を大々的に遂行せんとしており、それをいわゆる「返還」準備委員会を軸に促進しようとしていること。たとえば、沖縄の教育の「本土並み」の切替措置の骨子は、(イ)公選制から任命制への移行を中心とした教育委員会制度の改悪、(ロ)教育公務員の身分明確化、(ハ)琉球大学の琉球政府から、国（又は県）立への移管、(ニ)国選教科書・教育過程の適用ー等極めて反動的なものである。(5)更に加えて「平和産業の育成」とか「復帰後のために」とか称して東洋石油問題のように、独占資本のための工場誘致・その他きわめて反人民的なやり方で推進されようとしているのであり、更に、(6)沖縄を徹底して「観光と過疎」県にしようという極めて反人民的に展開せんとしているのである。これは実質的分離支配であり、〝第二の琉球処分〟と呼ぶにふさわしいものである。

かかる反人民的攻撃は全軍労・教職委員会を一本柱とする沖縄百万県民の「反戦復帰」の闘いを一層激烈なものにし、それにもまして、日帝が、かかる沖縄「解決」の諸政策＝「返還準備過程の反人民的展開を遂行すればする程、人民の怒りは、大きく全人民の階級的覚醒のテコへと転化し、かえっておさえつける為に政策上の手づまりを招来することになるのだ。こうした沖縄をめぐる日米帝国主義と沖縄ー本土人民の激突は、日帝の沖縄「解決」というペテン（これによって城内平和をはかりつつ、アジア侵略体制を七二年までに構築する）を全面的に破綻させており、これによって日帝は、増々強権的に侵略体制に移行せざる得なくなってしまったのである。

城内平和なき侵略体制ーこれが何を意味するのかは日帝と我々が一番よく知っている。即ち、それは内乱の条件の日帝からの持ち出しであり、日本革命達成への最短距離なのだ「沖縄」で日帝を叩けこれが我々の闘いの指標である。沖縄奪還・安保粉砕・日帝打倒の闘いを更に、一層おしすすめ、日帝のアジア侵略の危機を内乱に転化せよ！　これが我々の路線である。

日帝の六月全人民激動に対する異常なまでの緊張ぶりをもたらしたものは、第三に、国際通貨体制の解体的危機にもとずく日帝の新たな矛盾の発現＝経済的破局の切迫化であるこのことの詳しい展開は別の機会にゆづり、ここでは(一)ドル不安ードル危機に端を発する国際通貨体制の危機の深刻化に対して、アメリカと、各国帝国主義は、結局、ドルに一切手を触れないようにして、何とか危機を回避しようとしているのであるから、その破産はあまりにも歴然としていること。(二)日帝が（又は　円）がこうした世界経済の根底的危機の渦中に深々と身をのりだそうとしていること、それにより、日帝の経済的危機（＝高度成長のいきづまり）が、国際的環境によって直接に影響されざるえなくなりつつある、ということを指摘しておきたい。

こうした日帝の経済的破局の深刻化は、労働者人民に極めて過酷な犠牲を強いるものであると同時に、もはやいかなる意味において

も、かつての高度成長に支えられて表現されてきた「平和と民主主義」「進歩と調和」的イデオロギーを鼓吹することができなくなってしまったのである。

六月に対する日本帝国主義の異常なまでの緊張ぶりをもたらしている日帝の危機の第四は、十一月決戦の全人民的浸透＝中核派を主体とした革命的左翼の早急な戦力回復とその量的拡大、その影響力の増大である。

さきにもふれたことではあるが、日帝は、十一月において、一方では沖縄問題の逆用と他方では革命的左翼を徹底的に弾圧し、息の根をとめることによって、アジア侵略体制に移行せんとしたものであったが、だが沖縄問題を残し、（日帝は、これを十一月で終らせたかった）そして又革命的左翼をつぶすこともできなかったのである。一月三里塚・東大二月沖縄・三里塚に結集した労働者・学生・市民・農民の隊列は、敵階級の「過激派は壊滅した」という気安めと主観的願望を徹底して打ち砕き、日帝を苦闘の中にたたきこんでいる。大学では、政治ストが大衆の圧倒的支持を受けて堂々とうちぬかれ、自治会選挙では革命派（中核派）が民青・右翼・革マル等の反革命にうちかって続々と選出されている。労働者は十一月に最も勇敢に闘ったが故に最も痛手を受けたものであるが、にもかかわらず、二月二八日・三月一日の春闘討論集会での圧倒的結集は、その痛手をいやしても、直余りあるものである。

そして我々高校戦線に於ても、卒業式闘争の全国的爆発は、帝国主義的支配秩序の崩壊を一層生き生きとさせているものである。三五四校ーこれは昨年の四倍以上である。ーという数は、日本中の高校の約十分の一であり、十校に一校の割合で卒業式闘争が爆発しているのである。

しかも、①その戦術的多様性、②政治的組織性、③量的拡大の示すものは、我々が直接掌握できていないところでの闘いが、いたるところで形成され組織されていることである。

そして、これは高校生だけにとどまらず、労働者にも、学生にも、農民や部落民、在日朝鮮人や、自衛隊の中にも、いたるところで闘いが組織され「六月には」闘おうとする入達をはぐくんでいるのである。たしかに、十・八羽田以来「客観情勢の主体化・主体の客観情勢化」をめざして闘ってきた我々にとって、今日進行している客観的情勢の内乱的諸条件の育成は、極めて厳しい責任と任務をかけてくるものであり、我々の力は、微力たるものであるかもしれない。だが、アジア危機のただ中において、日本における階級闘争が戻ることのない内乱的死闘の時代につき進んでいることの実感は、我々の活動範囲をはるかに越えて広汎なものとなっているのだ。日帝の異常なまでの緊張ぶりをもたらしている根拠はここにある。

我々の六月安保決戦への路線

さて、かかる確認にふまえて、我々が打ち出すべき六月の路線は何か。いや何でなければならないか。それは即ち六月沖縄＝安保の巨万の全人民的高揚の連続的大爆発でもって、アジア侵略宣言たる日米共同声明と真向から対決し、七〇ー七二年において、その実現過程を粉砕し、アジア侵略基地を我々の手に奪取し、日帝の危機突破策をガタガタにうち砕き、安保粉砕・日帝打倒の大流動を切り開く、その中心的環が六月安保大決戦である、という総路線である。

日帝は沖縄の「七二年返還」準備過程の反人民的展開を中心軸に、自衛隊の徹底的増強と治安出動、その極東米軍の補助支柱としての位置の確立、反動的国家目標の確立、帝国主義的イデオロギーの鼓吹、三里塚軍事空港を頂点とする全土総臨戦体制化、ボナパルティズム的行政肥大化に伴う政治的臨戦体制化等を強権的におし進めることによって、アジア侵略体制を確立せんとしている。即ち、日帝の沖縄「返還」準備過程の反人民的展開は、沖縄現地にとどまることなく、日本全土に渡って侵略体制の構築と、その国民的合意のとりつけとして必死に強行されていることを、我々は決して見落してはならない。今や帝国主義の攻撃は、本土ー沖縄を貫き全面的である。だがしかし、にもかかわらず、こうした日帝の政策＝日米共同声明の実施過程は今ようやく始まったばかりなのであり、一切はこれから彼我の攻防によって決せられるのである。この点をしっかりと認識の基底にすえておくことが決定的に重要である。

何故か。それは七〇ー七二年の一切の政治過程を日帝の思うがままにさせるのか、それともアジア侵略宣言たる日米共同声明を人民大衆の力で粉砕していくのかが、七二年時ではなくまさに六月に問われるものとして、我々につきつけられているに他ならない。

他党派の諸君が、七二年決戦を呼号することによって、七〇年六月を回避し、逃げ出し、おざなりの闘いにしてしまおうとするのは、この点にかかわる把握を欠落させてしまっていることにその根拠があるのである。

いうまでもなく、日米共同声明のその全命運、成否は、日米帝国主義の「七二年返還」をテコとした沖縄政策の成否に決定的にかかっているのであるが、にもかかわらず、日帝の沖縄政策はすでに破綻をきたしているのである。第一に、日帝の「返還」が、帝国主義の沖縄政策の「根本原理」＝沖縄基地と安保堅持＝をいささかも変更するものではないこと、これに対する沖縄県民の怒りは日に日に大きくなっており、「基地と安保」に対する対決を不可避ならしめていることである。第二に、だが日帝はこうした沖縄県民の闘いに対して何らの妥協策を持たず、「返還」準備過程の反人民的展開を非選択的・非妥協的に行なわざる得ない。「基地と安保」は日帝の生命線である以上、これへの譲歩は絶対に許されないのであり、このことが逆に県民の闘いの炎を燃え上がらせていることである。第三に、こうした日帝の沖縄「返還」の非選択性・非妥協性が緩和されるという可能性は、今日とどまることのないアジア危機の破局的進行によって、最後の一片まで剝ぎ取られてしまうことである。アジア危機の深刻化に比例して基地沖縄の比重は決定的に高まる。B五二・毒ガス問題はその端緒に他ならない。第四に、日帝の沖縄の包摂によりアジア危機を日常にとりくんでしまうことである。

かかる情勢の中で沖縄奪還の思想的＝実践的立場は増々重要になってきており、特に、六月に於て決定的重さを有している。沖縄奪還こそが、社共的な「基地と安保」、日帝との対決を避けた本土主義・ステップ主義・支援主義あるいは、ブルジョア民族主義的・議会主義的・合法主義的「復帰運動」路線の腐敗と堕落を内在的に突破し、「沖縄」県民が「本土復帰」にかけた「基地と安保」への対決を徹底的にひき出し、日帝の沖縄政策に対して非妥協的に対決し、かつ我々が内在的に突破しうる路線に他ならない。他党派の諸君は、こうした社共的運動路線の腐敗・堕落を内在的に突破す

ることを放棄し「復帰」をかかげることは民族主義に陥るからナンセンスであるとして外在的にかかわり、沖縄問題の核心である「復帰」問題に対して逃げまわっている。こうした他党派諸君の「復帰＝日帝の武器」論による「帝国主義的返還」策動粉砕路線は社共的枠を突破することはできないし、当然にも日帝の「返還」準備過程の反人民的展開に対しても非妥協的に闘うことはできないのだ。

まさにそうであるからこそ、例えば革マル（反戦高連）のように、「サン三条破棄」のスローガン取り下げを「実質的に事態がそうなったから、」（それでは君たちのスローガンは敵と何ら対決していなかったということを認めることではないのか！）などという痴呆的な認識にそもそもメスを入れずに、また沖縄「返還」決定を前提化し、改良主義的な「返還準備委粉砕」に「返還」過程との対決をワイ少化する愚をくりかえしているのである（君たちはどこまで法制主義者なのか！）。もとより「返還準備委粉砕」の闘いは沖縄返還の闘いの重要な一項目である。しかしそこにだけ問題があるとするのは全く誤まりなのである。なんとなれば沖縄「返還」準備の反人民的展開の過程との対決は、巨大な階級的激突の過程であり、基地的な沖縄の現実の維持をテコとする日帝の日米アジア侵略体制の強化への反動的武装との総対決なのであって、「返還準備委」の存立そのもの及びその位置（又は決定権）はかかる過程の推移にかかっているのである。まさに革マルのこの見解と方針は、沖縄問題の深刻性と（日本の未来にとっての）根源性、したがって、日本階級闘争の命運を決する課題としての沖縄問題を、単なる一政策への政策反対の闘いへと歪少化するものなのである。そしてその根源は何よりも、沖縄の分離的軍事支配という現実に離れて、あれこれと方針を考えあぐねているというところにあることはいうまでもない。

さて、ML派（高校生解放戦線）の諸君たちは、いまや「沖縄の本土併合反対」、「革命的自治政府の樹立」などと、すでに破産し（革マルのいわゆる「沖縄人民解放めざして」論の焼直し＝文字通りの一県革命主義）たものを再たびとりあげるなどという決定的な堕落を深めているのである。

この沖縄の現実への空論主義的結論（本当に「沖縄人民民主主義共和国」の成立が至当と考えられるとすれば、これほどの空論はない）をもつ路線は、「本土復帰」にかけた県民の要求をふみにじる日帝への怒りを正しく日本革命（安保粉砕・日帝打倒）へとひき上げるのではなく、中国毛択東の「後進国自力更生論」よろしく、これを放置する路線以外ではない。これは極めて反動的であり、もとより本土プロレタリアート人民の革命的覚醒にもとずく日本革命の巨大な（最深の）解決課題としての沖縄問題を、日本プロレタリアート人民の戦略的発展方向から切り離すこととなってしまうのだ。

（そもそもML派には日本社会主義革命の一本筋の通った戦略というものははっきりしていないのであるが）そのことから日帝の「返還」準備過程を日本革命の立場からとらえず、ただただ日帝への政策を現象的においまわしているにすぎないのである。こうした事態におちこむのもまた、沖縄の日帝にとっての恥部＝急所的位置とそのことによってこれまで強いられてきた沖縄の分離の現実に正しく対決することができていないということの結果に他ならないことは言うまでもないのである。

沖縄奪還闘争の核心問題は、(1)沖縄が日帝と安保の矛盾の集中点である、という綱領的認識を基底に据えて、(2)日帝の「返還」準備

過程に徹底的に反撃を与え、(3)日米安保同盟をつきくずし、(4)そのことによって日米共同声明をその成立の環において決定的に粉砕し抜く、その最も的確で有効な路線をいうことである。それ故、沖縄奪還の思想的＝実践的立場は決定的に重要なのである。しかも、十一月決戦後、日帝の攻撃が新たな質をもって行なわれているのに対し、社共の「即時、無条件、全面返還」路線の全面的破産により、「本土復帰」にかけた沖縄県民の闘いは宙にうき、指導方針を求めて模策している現状をみるとき、沖縄奪還の思想的＝実践的立場はきわめて重要になっている。

七〇—七二年に於いて、沖縄奪還を水路とする安保粉砕・日帝打倒の総路線は増々重要なものとなってきており、とりわけ六月決戦を目前にひかえた今日、その重要性は決定的であることを、我々はっきりと確認しておかなければならない。同時に我々は、この沖縄奪還闘争の革命的推進は、第一に、「本土復帰」にあくまで依拠し、沖縄県民の闘いをひき出すこと、第二に、本土での闘いの爆発いかんにかかっていることを把えておかなければならないだろう。

いずれにせよ、本土—沖縄の日本階級闘争はその七〇年代的基本配置を七〇年六月決戦を通して決定することになるであろう。

日米アジア侵略体制を爆砕し、日帝のアジア侵略にむかう反動的武装に内乱的死闘をもってこれえる闘いは、あとにひき延ばされればされるほど増々困難となるということ、逆に我々の立場からいえば、決戦は早ければ早いほどよい、ということである。

再度確認しよう。

日米共同声明の展開過程は今ようやく始まったばかりであり、一切はこれからの彼我の攻防によって決定されること、その闘いこそ来るべき六月に他ならないのであり、かかる意味で六月は文字通り六月安保決戦なのである。

我が反戦高協は六月安保決戦に於て死力を尽し全ての人達の先頭にたって闘い抜こうではないか！

だが、かかる日本の命運を決する来るべき六月安保決戦は、我々に対してかつてないきびしい任務を課している。

十一月決戦の全人民的決起は、敵権力と革命的左翼の闘いの徹底的貫徹のうえにはじめて実現されえた。だが今日我々は十一月決戦とそれへの過程における苦しさ、困難さとは明らかに異質の困難にぶちあたっているのである。現在の我々のハダカの力量でどれだけのことができるのか、という厳密な検討のうちにたちながら、そのことと同時に、我々の予測をこえて巨大な全階級的大昂揚が爆発しかねないということとの間の落差を完全にうずめて、その政治的＝階級的昂揚を沖縄奪還・安保粉砕・日帝打倒へと飛躍させきることができるか否か—ここに六月安保決戦へ向う我々主体側の困難性が存在する。この困難性は既成左翼と我々の陣営の内部から発生する闘争放棄、決戦回避によって一層その困難性を増しているのである。

総選挙で大敗し、総評の崩壊に直面している社民は、今や「革新」勢力として持っていた広範な人民に対する反政府反権力の思想的影響力すら放棄しつつある。これまで日本人民は、反政府、反権力の姿勢を社会党、総評に託しまた社党の院内活動、総評の組合活動、両者による大衆運動を通して、自民党政府批判の材料を受け取り、反政府、対権力の最底の思想的基盤を形成していた。広汎な人々が七〇年六月を安保をめぐる歴史的決戦と信じてきたのもこの伝統の上にたってのことである。だがしかし、今日彼ら社民は議会内野党

への凋落を自民党への驚くべき屈服妥協によって克服できるかのように錯覚し、民社党顔まけの協力体制をしいており、国会において「日米共同声明」を論議の中心にすえて追求することさえ放棄し、沖縄、安保、朝鮮について現に進行している事態を暴露せず、総評もまた積極的に「六月は決戦ではない。」（十一月には、「十一月は決戦ではない。」「決戦は六月だ。」といって十一月から逃げ出したのだが）と強調し、政治闘争の放棄を推進している。六月ゼネストは徹回され、春闘の賃上げを中心にすすんで後退してしまっており、六〇年安保の亡霊たる「国民会議」を再びもち出すというていたらくである。これでは支配階級が増々厳しく六月に身構えるのに対し、労働者人民はその内部から武装解除されてゆくばかりである。

一方日共に至っては言うべきことばもない。公明党への〝言論弾圧〟攻撃に全力をふりしぼり、そもそも日米共同声明や自民党政府が存在していることすら忘れさせ、党勢拡大に狂奔しているのである。「民主連合政府樹立安保終了破棄通告路線」は、六月には何もしない、いや何もしてはならないということに他ならないのである。（そして今や六月には「何も起らないこと」を強調し、「デモのようなバカなことで安保はなくならない」（宮本談話）などと明らさまに人民の闘いに敵対しているのである。）

沖縄「返還」準備過程の反人民的展開に対して彼らは全く条件主義的緒要求を対置し、六月への彼らの登場は、ただ革命的左翼に対する武装反革命としてのみあるのである。

では革命的左翼はどうか。幸いこの間の我々の闘いによって、革命的左翼諸派は一様に「七〇ー七二年」に運動を集中する方向をとりはじめている。だがしかしその中味は沖縄が抜けおちているため全く無内容であり、十一月敗北論、沖縄問題終了論にとらえられて〝なぜ七〇ー七二年の枢軸が六月にあるのか〟は、全然不明のままただ日程だけを合わせているに過ぎず、六月の位置は全くない。特にML派の諸君にいたっては、四回を費して「赤光」紙上に連載された「日帝打倒、アジア革命勝利」なる大論文の中で一言たりとも六月についてふれられず、六月なき七二年決戦をただただくり返えしているに過ぎないのである。かかる主体的情勢の示すものは、六月安保を歴史的決戦と信じている圧倒的広汎な大衆が、今や指導部のないまま路線のないまま放置されているということである。

このような日本型社会民主主義の政治闘争からの完全な逃亡、議会内野党としての凋落の圧倒的進行によって、わが労働者階級は大量的に放置されてしまったのであり、労働者階級の指導は、自民党と我々革命的左翼との間の激しい攻防戦にかからざるをえないのである。

我々はいまただちに、社民にとってかわって指導部に全面的になりきるだけの組織的力量を残念ながら有していないが、にもかかわらず少くとも六月決戦の渦中では、我々以外に何らの指導部も存在していないのである。このことは、現在時点に於いて労働者階級がどの程度白ヘルメットの下に組織的系列化されているかには直接規定されることなく、湧出する大量的エネルギーが我々のもとに一挙的に獲得されかねないという条件が今月成立していることを意味している。と同時にそれとは逆に、そのボウ大な全民衆的エネルギーが敵階級になんらの効果的打撃を与えることなく霧散してしまうという危機がはらまれていることを意味するのである。高校戦線に於

いても、かかる全人民的情勢に規定されている。このような情勢を我々はしたがって、絶好の機会の到来としてとらへかえし、日本階級闘争の革命的ヘゲモニーを社・共から奪取し、一挙的に公認的指導部になりきるべく闘いを推し進めなければならないのである。

我々反戦高協は全国四五〇万高校生大衆の公認的指導部へ自らを高めるために命がけの飛躍をもって応えようではないか！

バリケード春闘で闘う反戦派労働者とともに、今再び六月決戦を担いきろうとしている全学連の学生諸君とともに、圧倒的な高校生を率いて日米共同声明を永遠のかなたへ葬り去ってしまおう！

今、我々はかかる六月安保決戦への総路線をうちかため、勇躍六月に向けて怒濤の如き進撃を開始せんとしているのであるが、六月決戦の全人民激動は、六月をとりまく世界史的現実に規定されてそれ自体が我々の予測をもこれて一挙的に日帝の体制的危機につき進む万能性を充分に秘めているのである。「日本の七〇年六月」は「フランス五月」的情勢にならないと誰がいえるだろうか。むしろ我々は、そうした情勢を積極的に攻撃的にひきづり出すという姿勢と展望をがっちりとうちかため、根本的には、今日が三〇年代危機の続きの時代であり、三〇年代的階級闘争の今日的展開は、危機を待つという姿勢のうちにではなく、見せかけの資本主義の発展のふところ深く飛び込み、体制的危機・革命前的情勢を引きずり出すことのうちにあるのだということをはっきりと把えておくべきだろう。

まさに六月安保決戦の全人民的激動は、我々の側から積極的に決戦としてしまうことによって決戦たりえることを深く命じておくべきであろう。

四・二八沖縄奪還
六月安保決戦と高校生の任務

四・二八沖縄奪還闘争を全国動員の力で
大衆的に爆発させ、都心を実力でうめつくせ！

さて、このような六月安保決戦の全人民的激動は、我々全国四五〇万高校生の総決起によって飛躍的に日米共同声明に対する直接的打撃力を徹底的に有効果たらしめ「武装する」教師を、「親」を、支配階級を、その政治的な代表者たる佐藤をとことんおびやかし、あわてさせ、絶望の淵に追い込むであろうしあるいは、全人民的激動を生き生きとさせ、発展させ、闘う人々を一層勇気づけるものである。しかもそれ以上に六月安保決戦への高校生の総決起は、この激動が表面的で一時的な怒りの表現ではなくして、文字通り社会最深層部からの根底的な帝国主義支配秩序を転化させ壊滅させる闘いであることを、そして一部の人々やある特定の階層に属する人達の闘争ではなく、文字通りありとあらゆる人達の闘いであり、全人民的激動であることを六月の渦中にいる人々にはもちろんそうでない人々に鮮明なすばらしい形をとって現実の目の前にあるものと理解させるものである。

かかる六月全人民的激動に対し、我が反戦高協は何をすべきか。我々は今までのびてきた全内容を一層深部に渡って把握すること

を前提的にふまえたうえで・・・・・・

第一になすべきことは、六月安保決戦を「宣言」し、巨万の高校生の隊列を組織しそれを率いて街頭に進撃することである。闘いはいつもそうであるように、量と質、内容と結果によって勝敗が決せられる。だとするならば、我々は六月決戦時において巨万の隊列を組織するために文字通り生命がけの活動を直ちに開始しなければならない。そして六月時における高校生はこれまでのように補助的部隊ではなく、全国反戦、全国全共闘とならんでその量と質に於ても実質的な第三の柱としての地位を確立しなければならないのである。反戦派労働者や学生より量において決定的に劣るということは高校生運動の未熟性をあらわすものであって、我々はこのことを恥じよくとして受けとめなければならない。

第二になすべきことは、学園闘争を全国的に一挙的かつ波及的に大爆発させることである。我々反戦高協は現在の高校のありとあらゆる矛盾・腐敗を批判し攻撃し闘争を積極的に爆発させねばならない。

今日処分の全高校的発動は日増しに拡大、強化されている。だがそれは学校当局　支配階級が欺瞞的教育や話し合いによって我々高校生を納得させることができない弱さの表われであり、七〇年代高校教育政策の全面破綻の必死の巻き返しでしかないことを我々はその核心に於いて見抜いておく必要がある。即ち、教育内容の多様化をテコとする能力別・目的別差別・選別体制と、それを支える自主性抑圧政策を二本柱とする現在の高校教育体制は、六九年卒闘を決定的な起点とする我々の闘いの中にあえなく破綻をきたし、さりとて、それが六〇年から十年間七〇年代を見通して形成されてきたことから日帝はこの体制を何ととしてでも防衛せざるをえないのである。処分の激しさ硬直性の根拠はここにある。

評価の問題、処分の問題は、この一つのものの別々のあらわれでしかないのであって、それ故我々は様々の矛盾・腐敗の根拠を帝国主義の矛盾・腐敗に帰因するものとして的確に把握し、「帝国主義的高校教育体制粉砕」のスローガンを提起して一切の高校学園闘争を位置づけ、「全ての高校生は政治活動の先頭に起て」「高校を安保粉砕・日帝打倒の砦とせよ」の綱領的スローガンを闘いの針路としてきたのである。そしてその路線はものの見事に我々反戦高協の闘いを決定的水路として実現されてきたのである。

今日、四月新学期早々、処分をめぐり、評価をめぐり、あるいは政治的活動の権利をめぐって高校学園闘争の爆発は必至である。我が反戦高協はこの闘いを呼び起し、先頭に起って闘い、闘いを勝利に導いていくとともに、なおかつ闘いの過程で大衆の中に大胆に政治（安保・沖縄）をもちこみ、高校生を六月安保決戦へと組織していかなければならない。

だがしかし、我々は今日高校学園闘争の革命的展開のもどかしさに苦しむというよりは、その速さ、深さ、広さの急激化に苦しむこととなるであろう。たしかにそれは、我々にとっては好ましいものであるのだが、にもかかわらずそれがひとつ間違がえば闘いの長期的停帯＝反動の勝利に転化しかねない危険を含むものである。

一般に、しかしより現実的に、革命主体勢力の一時的高揚へ＝党の強化に支えられない単なる量的増大化）は、それに襲いかかる帝国主義国家権力の狂気に満ちた反動攻撃を根底から打ち返しうるスジガネ入りの反撃力と切り拓いた地平をうち固めることのできる力

が欠如している場合には、一挙に大敗北を契し、長期にわたる冬の時代を強要されることになってしまうのである。

第三に我が反戦高協のなすべきことは、それ故このような大衆的高揚を権力の攻撃をうち破って発展させることができうる自己の生命がけの飛躍、即ち、反戦高協それ自体の徹底した強化を通して反戦高協を全高校生〃高校生運動の指導部的位置の確立〃である。

反戦高協の独自の強化、拡大は様々な実践を通す中でしか成しとげられないことはいうまでもない。レーニンはその「左翼小児病」の中で「ボルシュヴィキはいかにして強化されたか」という自らの問いかけに「それはプロレタリア前衛の意識、革命に対する献身性、自己犠牲・英雄主義によってである」と答えている。我々はこの立場に徹底的にたたなければならない。次に我々は必ず基本会議を設定し、緻密な政治討論を行なうべきである。革命運動は会議に始まり会議に終る。最後の会議は武装蜂起を決定する会議であるーとは革命運動における会議の重要性をいみじくも喝破したものである。我々は更に加えて、徹底した学習会活動を推し進めることが必要である。もちろん我々は革命の実現する過程それ自体が教育であり、実践の中から学んでいくという基本的立場が絶対的に堅持されなければならない。このことは三里塚少年行動隊の闘いの中にも鮮明に貫徹しているものである。にもかかわらず自らの思想性を深め、質的に高めていくためにもいくつかの基本的古典を精続する必要がある。こうしたいくつかの組織的実践の中で反戦高協はうち鍛えられるのである。反戦高協を最もよく鍛えるものは闘いの中であり、闘いの中で大衆から信頼されてこそ反戦高協の指導的位置を確立することも可能なのである。

第四に我々反戦高協の成すべきことは、統一戦線の形成である。この統一戦線の問題は第一〜第三までを展開する上で決定的役割りを果すのである。

我々は統一戦線術に関する原則的諸問題を確認しておく必要がある。統一戦線の目的は次の四点に要約することができる。

まず第一に、帝国主義国家権力との闘いにおける力の強化である。もちろんこの場合、「別個に進んで一緒に撃て！」というレーニン主義の原則が貫徹されない限り、統一戦線を組むことがかえってマイナスにはたらくことはおさえておかなければならない。

第二に、既成左翼なかんずく社共の「闘う部分を排除した闘わない」統一戦線に対する革命的左翼独自の闘う統一戦線の形成である。単なる社共に対する批判的批判では社共支配を真の意味でくつがえす力とはなりえない。何よりもまず革命的左翼の独自部隊を物質力として登場させることが必要なのだ。

ここで述べているのは革命的左翼陣営内の統一戦線に関してであるが、もちろん社共共闘それ自体を革命的に分裂させることも必要である。今日、社共の六月に対する敵対・放棄が進行し、労働者階級が指導部のないまゝ放置されている時、この空洞をうめる為にも社民との統一戦線はますます重要になっている。

第三に、革命的統一戦線の下に結集してくる巨万の大衆を自己の党派の下に系列化することである。大衆それじしんが党派的に分裂するということは積極的に受けとめる必要があり、ノンセクトなどというのは過渡的な産物にすぎないことをおさえなければならない。臣人族の闘いとはこのことである。

第四に、統一戦線の中で指導性を発揮しながら独自の組織建設を

おこなうことである。他党派の活動家を吸収することもこれに含まれる。

以上のような統一戦線の立体的構造をことごとく否定し、「他党派解体のための統一行動」に一面化したのが革マル派である。それも闘争を反革命的に固定化しながら他党派を解体するのであるから共産党の統一戦線と本質的に同一であり、自称「革命的左翼」を名のるがゆえにより犯罪的といえるかも知れない。帝国主義＝敵に対しての力を増大させることのない統一戦線―これが革マル派の統一戦線である。そのうえ彼らは我々に対してスターリニストと同じ規定をおこなう水準にまで堕落している。曰く、「彼らは（五派共闘のことを）我々の断乎たる党派闘争の推進とその貫徹がないならば、このようにより犯罪的な破産を重ねつつ悪無限的に職業的挑発集団として左翼から見むきもされなくなる……」（『解放』一三九号）六九年七月におこなわれた革マル派の「全学連」大会では再び我々を「挑発者的機能によって反革命集団へ転化している。」（革マル派「全学連」大会議案書）と規定し、スターリニストに十年ぶりに先祖返りしたわけである。

我々はこうした革マル派の言葉が、我々との統一行動を彼らが最終的に断念したものと把えかえし（なぜなら「挑発者・反革命」と統一行動を組むことは、彼ら自身の論理的矛盾であるから）革マル派の存在そのものを共産党と同じく粉砕の対象にしていく必要があるだろう。

こうした統一戦線の原則的諸問題にふまえて、我々はノンセクト・アンチセクトの諸君・べ平連や他党派の下に結集している学友諸君と相互討論相互批判を行いつつ統一戦線を強固に形成していかねばならない。各校単位の全共闘を形成・確立させ、更にそれを都・道府県単位のそれへと飛躍させ、全ての闘わんとする高校生にその機会と方針を与えそのエネルギーをひき出し、汲みつくさなければならない。すでに東京では、全都高校生共闘会議結成大会の準備が我々のヘゲモニーの下で着々とすすめられている。

だがこれだけでは物事の半面を語ったことにしかならない。「統一戦線の核心問題はそのヘゲモニーを誰が握るかである」ということが決定的に重要なのである。統一戦線のヘゲモニーを握ることによりそれを通して大衆を指導することが可能なのである。統一戦線の最高形態であるソヴィエトも、メンシェヴィキのソヴィエトかそれともボルシェヴィキのソヴィエトかが争われ、ボルシェヴィキが指導権を獲得することにより、一一月武装蜂起を成功させることが可能であったのだ。我が反戦高協は断々固としてあらゆる統一戦線のヘゲモニーを革命的に獲得しなければならない。だから再度確認すれば、反戦高協の独自的強化と統一戦線術は決して分離することができないのである。

さて、第五に我が反戦高協のなすべきものは六月安保決戦を闘う我が反戦高協にとっての決定的環となる。

四・二八沖縄奪還闘争の大爆発のために文字通り死力を尽し全力をあげて闘い抜くことである。

何よりも我々がその根底におりて把えておくべきことは、四・二八は沖縄奪還闘争であることである。このことのもつ意味は極めて重大である。

第一に、四・二八沖縄奪還大闘争の革命的爆発いかんで六月安保決戦の質は決定されることである。六月安保決戦を日米共同声明への全人民的決起によって粉砕しきることができるか否か――即ち六月安保決戦を沖縄奪還として闘い抜けるか否かは、四・二八沖縄奪還闘争に一切がかかっているのである。

第二に、六月全人民的激動に敵対し反革命的登場のみその政治性＝組織性をかける社共といえどもこの四・二八への取り組みそれ自体を放棄することができない、ということの我々側からする重大な意味である。即ち、社共既成指導部の「即・無・全」路線は、日帝の「返還」準備過程の反人民的展開の前に全面破綻し、社共は「返還」終了論のうえにたち日帝に全面屈服し改良主義的要求・条件主義への道を歩んでいる。日帝の沖縄「返還」政策に対し、革命的左翼の沖縄奪還の対置か、それとも日共に象徴される条件主義的対置か――四・二八首都東京における革命的左翼と既成的左翼との大衆的結集の質と量、内容と結果をめぐる階級闘争でどちらが勝つか――ここに四・二八沖縄奪還闘争の革命的爆発のカギがあり、ひいては六月安保決戦の成否がかかっているのだ。

第三に、それ故我々は四・二八沖縄奪還闘争に全力をあげ、文字通り死力を尽して圧倒的数量にのぼる高校生を首都東京に結集させなければならないのである。四月中旬あの偉大なる全軍労第三波実力ストがうち抜かれようとしており、全軍労の革命的闘いは又もや日米帝国主義を苦闘の内にたたきこむであろう。だがしかし、沖縄奪還闘争は本土の闘いにその決定的環があるのである。

すでに全国反戦・全国全共闘は四・二八沖縄奪還全国動員を決定している。我が反戦高協も全学連に先がけて全国動員を決定せんとしている。四・二八沖縄奪還闘争の大爆発を全国動員で勝ちとり、警官隊の壁を突破し都心実力制圧を実現しようではないか！

第四に、かくして四・二八沖縄奪還闘争は決して六月決戦へのステップ闘争としてではなく、それ自身重大なる決戦としてうちぬかれなければならない。我々がもてる全力量を全力投入し、四・二八沖縄奪還――六月決戦の幾波にも及ぶ激動の一つ一つを決戦としてうち抜くこと、ここから全ての展望がひらけるのである。

第五に、四・二八は沖縄奪還闘争であると同時に破防法発動一周年の闘争でもあることである。このことを我々はいささかも軽視してはならない。沖縄奪還闘争に破防法が適用されたことの意味を我々は決して見落してはならない。日帝は十一月決戦時とは全く異質な攻撃をかけてきている。十一月決戦時の凶器摘発から四―六月の組織壊滅への転化はもはや誰の目にも明らかである。このような攻撃の質的高まりの中で、今日党組織論・党建設論が多く語られ提起されている。だがしかし、国家権力の攻撃からいかに組織を防衛し闘いを保証するのか、というボルシェヴィキ的原則を忘れた組織論議は空論でしかなく形態論議でしかない。

我々反戦高協は、こうしたレーニン主義的党組織論にあくまで立脚し、合法・非合法、公然・非公然、とりわけ合法の非公然的実践活動に習熟しなくてはならない。四―六月、日帝は白ヘルメットに破防法を全面適用しその壊滅をねらっている。我々は断乎としてこの攻撃をはねのけ、四―六月決戦の大爆発を実現していかねばならないのである。

六月安保決戦を闘う我が反戦高協のなすべきことは大略以上の様なものである。四・二八沖縄奪還闘争への全力投入こそその中心的決定的環である。

四・二八沖縄奪還闘争（破防法発動一周年闘争）を全国動員の力

で大衆的に爆発させ、都心を実力でうめつくせ！

四・二八・一切を東京へ！　一切が東京へ！

我が反戦高協は四・二八沖縄奪還大闘争を高校生の手で実現させよう。

おわりに

さて、この章を終わるにあたって、中でふれなかったことについて簡単に指摘しておこう。

第一に、植民地・民族問題であり、人管体制の問題である。今日的情況の中でこの問題にかかわる認識と思想性は増々重要になってきている。とりわけ朝鮮問題はそうである。(1)日帝のアジア侵略、特に朝鮮支配の基本的歴史事実及び今日的情況を正確に把えること(2)在日アジア人民の闘いには、たとえそれが誤っている点を少なからず含む問題性を有していても、我々の思想的＝実践的立場はこれと断乎連帯することである。(3)民族・植民地問題に対する我々の基本的態度は。(イ)帝国主義本国のプロレタリアートの闘い「侵略戦争を内乱へ」にその解放がかかっていること。(ロ)「他民族を抑圧する民族は決して自由ではありえない」というエンゲルスの言葉に鮮明にあらわされていることである。

第二に、三里塚――農業・農民問題である。(1)今日農業・農民問題は帝国主義が解決できぬ問題となっていること――農民見殺し政策が反動的に行なわれていること。(2)これに対する農民の闘いは三里塚を頂点として日帝とますます非妥協的になっていること。このことによって日帝の体制的危機は増々深まっていること。(3)我々にとって農業・農民問題は労農同盟・プロレタリアとプチブルジョアジーとの統一戦線の問題としてあることである。

（了）

任務方針「七〇年四～六月安保決戦を四五〇万高校生の闘いとせよ！」

報告　議長　木村　精一

だがしかし、さらにブルジョアジーにとってぬきさしならぬものは、11月決戦的質をもった政治闘争の全人民的侵透である。一月三里塚の少年行動隊の登場、沖縄全軍労労働者の武装と反戦派労働者の増大、そして高校における「悪しき」（革命的と読め！）ゲバ高校生の増大である。

とりわけ戦前における天皇イデオロギーは今日帝国主義にとって、役立たずになっている以上、〝教育〟というあたかも帝国主義支配から相対的に独立しているかのような政策を駆使する事に、イデオロギー的支柱を求めていた。小学校中学校の義務教育化と高校の乱立は、卒業すればすぐにも工場に送りこめるし、国家が比較的統制のきくものとして重視されている。

帝国主義段階における教育とは、むしろ今日の危機的情況にあっては、まことに帝国主義支配イデオロギーの貫徹の場でなければならなかったのだ。

だが「ゲバ高校生」の増大に最も鋭く表現されるごとく、その意図は破産しつつある。しかも不貫徹ならしめる要因はいぜんとしてつきない。反戦高協を指導部とする高校生運動の奔流は底をつきないものとして次々に流出せんとしており、企業家あるいは国家の統制にしたがわない反戦派教師が逆に登場し、高校生反乱は帝国主義者に二重の恐怖をつき出している。一つは帝国主義教育の破綻、あと

〈1〉帝国主義的高校教育の破綻と六九年反乱の爆発

(1)　帝国主義とわれわれの闘い

11月決戦は青山高バリケードに始まる全国高校政治バリケード闘争として高校生を街頭に引き出し、高校生自らの手による独自軍団の形成と、同時にそうした帝国主義の危機と一層のプロレタリア的自覚を全国高校生に植えつける事となり、大衆の戦闘化を〝正常な〟事態とする時代を切り開いていった。

六九年11月決戦における日米共同声明の登場を「敗北」とする諸君たちの言辞にもかかわらず、帝国主義のより一層新たな危機への突入は誰の目にも明らかな事である。ベトナム戦争の敗北（後進国半植民地支配の崩壊過程）と、朝鮮危機（朴軍事政権の動揺）を一方の軸とし。他方アメリカ帝国主義の経済危機－日帝の経済的膨張とアジア侵略への不可避的展開という万力の中で、日帝はなんとかして〝城内平和〟（国民的合意）のもとで侵略をはからんとしたにもかかわらず11月決戦は、革命的左翼（とりわけ中核の存在）を七〇年代階級闘争の主役として登場させるに充分な土壌を切り開いてしまったのだ。

一つは高校が革命の学校の役割を果たしてしまう事である。

そもそも手工業生産に物質的基礎をおく時代にあっては、教育とは従弟制度であった。マニュファクチュアの時代において、生産者を商人資本家とし、中世的都市工業の同職的組合的手工業に対立させ、さらに根源的蓄積過程（労働者を彼の労働条件の所有から分離する過程＝社会的生活および生産手段を資本に転化し、他方で直接的生産者を賃労働者に転化する過程）を通じて創り出される自由労働者群の創出は従弟制度の崩壊＝従弟からの解放をもたらし、①農村生産者、農民からの土地の収奪による賃労働者を創出したが、②それは同時に厖大な不熟練労働者の産出（手工業活動の分裂）を意味し、労働者の育成にとって、やはり長期の修養期間が必要となり資本は絶えず労働者の不従順（資本の要請に合致しないため）と争闘しなければならず、それに規定されて、教育は重要な役割を果たした。「工場条例」による標準労働日の設定は自立的機械装置の運動による労働の強化をもたらし、この強化は相対的剰余価値生産の動力であり、労働過程における相対的剰余価値の生産においては「労働の生産力を増大し、労働の生産力の増大によって労働力の価値を低下させ、かくしてこの価値の再生産に必要な労働日部分を短縮するためには、労働過程の技術的及び社会的諸条件を、つまり生産様式そのものを変革しなければならず」、労働の転変、したがって労働者のできるかぎりの多面性を一般的な社会的生産法則として承認しこの法則の正常的実現をめざすものとして、全体的に発達した労働者を要求することとなり、相対的剰余価値生産を基底とする労働力と教育との資本制的連関を成立させていった。初等、中等教育は資本の要請が国家へ（権力またはイデオロギー）の介入をもって現実化させられる。

〃死滅しつつある資本主義〃である帝国主義段階における高校教育は、系列的な〃科目〃の設定、たとえば自動車産業の要請としての自動車設計科等を整備し、さらに侵略する為には無条件に賛成を国民的合意とし、国家意志の統制下におくためのイデオロギー攻撃の場とせしめ、さらに個々人の生き方を最終的に、反動的に決定する場が高校教育の本質に他ならない。そうであるが故に政治闘争を行なう革命的学友を処分しなければならないし、それでもあきたらないとみるや（むしろそれ以上の恐怖の現われとして）学警協力体制を文部省通達という名のもとに構築し、政府、警察、学校の三位一体を軸にわれわれの闘争を圧殺してくるのだという事をはっきりと確認しておかなければならない。

帝国主義段階におけるブルジョアジーは、自己の支配の終えんをすでに自覚しており、未来に何らの希望ももち得ず、ただ現在にしがみつき現状維持に窮々としているが、現在の高校教育はその彼らの姿勢と意図に徹頭徹尾染めあげられているのだ。だが、彼らに未来がないからといって、未だ若いわれらが未来をもって何故悪いのか！いわれたとおりの枠の中で努力さえすれば、「偉くなり」「金持ちになり」「幸福になる」と教えている当の教師や大人たちが全く「偉く」なく「金」を持たず、「幸福」でもない現状をまざまざと見せつけておきながら、何が〃教育〃というのか。

六九年階級闘争の場に反戦派労働者、全共闘学生、三里塚農民と共に公然と姿を現わした高校生の闘いは、かかる死に頻している帝国主義の根底的動揺と破産に起因していたのであり、当然のことながら、帝国主義に対決し打倒していく闘いの中にのみその活路を見

出せるものなのだ。

だからして以前の「仰ゲバ尊キ」教師の幻想は一ぺんにくずれ去り、「ゲバを仰ぐ」対象にとってかわり、「君が代」とする時代は終わり、「われらが世界」を創出すべき時代に変わりつつあるのだ。かくして六九年高校生の反乱・バリケード・闘争参加は爆発的に勝ちとられた。

いうまでもなくこの過程は容易なものでは決してなく、最初は自己の〃常識の哲学〃を打ちこわす必要があり、「多く金をとれるサラリーマン」といった自己の色あせた進路を打ちこわし、家族のしめつけや教師の慟喝から逃避することなく闘うことが必要であった。われわれは、腐敗せる帝国主義の支配に怒りをもち、自己がかってはその支配を結局は認めていたことに怒りを覚え。起ち上がったことを決して忘れてはならない。だからこそバリケードの意味は深く、バリケードこそ闘争の一切を象徴していた。物質的な意味におけるバリケードはなくとも、自己の胸中に強固に築いた、〃現在〃を否定し、革命を志向する内なるバリケード＝思想は、帝国主義者といえども破壊する事は決してできないのだ！

(2) 「反乱」から方法の獲得へ

闘争は今新たに開始された！

反乱の炎は革命の思想によってさらに強烈に吹き上げなければならないし、さらにきびしい試練にかけなくてはならない。今まで通りのやり方からさらに、非公然的な、非合法的な、あるいは公然とした、合法的な闘いを多様に駆使しなければならない。敵＝帝国主義者と学校当局は様々に弾圧を開始している。大衆と活動家の分断、家族への慟喝、刑事の尾行。教師によるビラのとりあげ、処分攻撃が高校生という未来を意味する存在であるが故に、狂気の如く今かけられている。この攻撃を受けとめ、はねかえすのは誰なのだ。この僕であり、君たちなのだ。敵がわれわれを大衆から引き離そうとするならばわれわれは、ありとあらゆる手段）をもって全高校生と結びつき、刑事の尾行には革命的警戒心をもち（何んでもないのに尾行と錯覚し。家にとじこもりばなしでは反革命になるぞ）、うまくまき、ビラのとり上げには、断固として反対し実力防衛を貫徹し、逆にハレンチな教師を弾劾せよ。そして切りふだである処分には、確固たる闘争の自信（思想の貫徹）をもってのぞみ、全高校生に呼びかけ、共通の課題として闘いを組織せよ。それでも当局が撤回しないならば。あとは実力を行使するのみであり、処分を恐れない気構（最後的に、決定的な事だ）をはっきりと堅持し、自分一人になっても闘う事がきわめて重要である。処分されても闘いはどこにでもある。そうした自己を確立する事が反撃の第一歩である。闘争とは実に様々な方法をわれわれにおしえてくれるのだ。単なる反発をくりかえすばかりでなく、敵＝帝国主義者のねらいがどこにあるのかを分析し、どういう組織を作ったら闘争が永続するかを学び、常に自己を革命の思想の中におかなければならない。常に自己が革命的であるためには、毎日の活動を点検し、全高校生への呼びかけ（ビラ入れ、オルグ）、政治討論（会議。学習会）、財政の維持（カンパ）を行なわなければならない。そうした方法を獲得しない限り、

闘いは鎮圧されるものであり、革命への発展はありえない。ましてや六八年高校生反乱の単純な固定化や延長線上に変革を夢みる諸君は論外であり、ともすれば「逃避」がいやで運動を起したものが、その運動の中に安住感を作り、逆に逃避の場を見出す諸君（ノンセクト・ラディカルと自称する諸君や、そうした考えにシンパシーをいだく諸君たちへ！）は早急に自己を点検すべきであろうと思う。

確かにバリケードは、われわれを既存の束ばくや規範から一瞬間たりとも解き放ち、解放感を与え、そこで知った本来の人間関係の予感に感激させる。だが、そこも決して安住の場でないこともまた事実だったのだ。むしろわれわれは、六九年で高校生が知ったこの闘争の喜びと苦しみが、帝国主義者を異常に恐怖に陥こんでいることを見ぬき、〃内乱の七十年〃へ向って、社会的反乱として自己を貫徹していかなければならない。

しかもわれわれは、闘いの喜びと苦しみだけでなく闘いのやり方まで覚えてしまった。誰が敵で誰が味方かもわかってしまった。いまこそ四～六月安保沖縄決戦にもうひとつ大きなうねりをつくりだし全高校生を圧倒的に立ちあがらせ主導すべく政治闘争の先頭に起たねばならない。

迫りくる革命の現実性は、われわれに重大な階級的役割を要請している。もはや一片のちゅうちょも許されない。歴史の幕あけを自らの手で担う事を誓おうではないか。

<2> 〃怒り〃を組織し高校を革命の砦とせよ！

六九年に爆発した高校生運動の主役われわれは生まれて以来十数年。支配者階級の物質的基盤とその従属としてのイデオロギーの中で支配者階級と同じ思想の下で生活をしてきたが、帝国主義高校教育が一層、緻密かつ細分化の一途を辿る中で全く非人間的な扱いをうけ。その矛盾の認識はすなわち自己の階級的存在の認識であり、もってはじめて怒りを爆発させるゆえんとなったのだ。

六九年高校生反乱は、日本の帝国主義が日米共同声明＝アジア侵略宣言を行った十一月をその頂点として闘われ、帝国主義が侵略を開始するためのイデオロギー的支柱を形成せんとし、教師を介在させ、帝国主義者にとって「良い子」を作らんとしている事への拒否であり、その事を通して政治参加、デモ→組織者の契機を作り出していった。対象変革と、自己変革の連関は今やすべての高校生の日常的課題となっておりかってのブルジョア的価値観の崩壊へとつき進み、新たな階級意識（プロレタリア的存在）を自覚させていった。この事は、帝国主義者を恐怖のどん底へおとしこめざるをえない。いま帝国主義者はアジア侵略にむかって革命的左翼とそれを軸とする新しい運動の一掃を必要としている。

だがわれわれ高校生の闘いの爆発はいまや抑え難く歴史の必然である。何故なら既にわれわれは闘い以外の何の権威も何の信頼も何の未来も見出すことはできないからだ。そして、この高校生の闘いの爆発は数年先の日本の社会を決定的に破壊する爆薬庫に等しい。

既に今春、かの山崎君虐殺に象徴される十・八羽田闘争を一年生で迎え。日大闘争、東大闘争の爆発と新宿騒乱闘争とを二年生で迎え、そして十一月決戦と高校生の総反乱を三年生で経験した先輩を社会の至る所に送り出した。工場に、官庁に、大学に、農村に、自衛隊に、その他社会のあらゆるところに、三年間の経験豊かな高校生が入っていったのだ。高校生は自衛隊員にもなれる！国鉄労働者にもなれるしさらに言えば、国家機関の中枢にまで入れる！考えても見よ。革命的高校生全てがこうした戦線に配置された時を！

七〇年代は第二第三の小西を生み出し。軍隊内部を分裂させ革命軍にもできる。まさにこれからの時代の方向は高校生の手に握られているのだ。言わば〃火のついた今日の高校〃は〃革命の学校〃になりつつあり〃革命の緊迫性に応えるべく〃革命の貯蔵庫〃たる使命が要請されている。「子供だから」とか「まだ知らなくてもいい」といった時代では断じてなく、全人民的課題＝革命とは、全ての人民を革命の参加者とすることであり、文学通り高校生は何にも優れる若さと、はつらつさ、真面目さをもっており、飛躍的人間であり、戦闘力は底知れない。我々の高校を一つのこらず革命の波で洗い、高校を安保粉砕、日帝打倒・沖縄奪還の闘いの砦＝革命の貯蔵庫とせよ！

<3> 四～六月全ての高校生は政治斗争の先頭に起て！

わが反戦高協は、一〇・八羽田以来二年間の闘いの中で。反戦派労働者、全学連との連帯をかちとりつつ「革命の現実性」を常に語りその認識に基いて息つくひまなく闘ってきた。そして11月決戦を打ち抜いた今日、われわれは。日本革命の緊迫性をはっきりと射程にとらえ、日帝打倒の環をこの手につかんでしまった。まさに「革命の現実性」は。闘う主体の執念の中にあり、これからもそうである。しかしわれわれは11月決戦の勝利の中で、今や、その闘う先頭部分の中にあった「革命の現実性」を全てのプロレタリアート人民が自分のものとする第一歩とすることに成功したのである。われわれの任務は鮮明である。今まで以上に「革命の現実性」「日本革命の緊迫性」を情宣しなければならない。すでに十数年もの間、帝国主義との死闘を展開しているベトナム人民は、今日のことかと、帝国主義本国プロレタリア人民による帝国主義打倒を待ち続けている。さらには、（スターリン主義者によって今日、その革命を変質させられたとはいえ）すでに五三年前、ロシア帝国主義は打倒されている。われわれはこの四〇年間の空白を無駄にすることなく、痛苦の怒りを帝国主義打倒の力としなければならない！そして、その一切のカギは、われわれ高校生一人々々の手に握られているといっても過言ではない。

日帝は、これまで沖縄を米帝の分離的軍事支配によってアジア危機の国内への波及をくいとめてきたのであるが、日米共同声明によって今後は、日帝が沖縄を本土へ「抱摂」し、維持しなければならなくなったのだ。そのことは、アジア危機の集約点＝要としての沖縄の矛盾、危機を（したがってアジア危機を）日本階級関係の中に構造化したことを意味している。つまり城内平和のない日本にアジア危機を持ち込む事となった。

日帝の危機の全面的開化は、人民全てにその矛盾を押しつける事となり、七〇年一月、二月は全軍労闘争爆発、三里塚農民、少年までをわがプロレタリアートの下に結集させるものとして現出し、さらに長き圧政の下、とりわけ在日少数民族への非人間的抑圧と、部落民への差別を日常とする時代は帝国主義の危機と同じくして、革命的爆発の様を呈している。

そして高校生が等しく労働者階級とスクラムを組む時代、これが七〇年と七〇年代であることを喜びをもって自覚しなければならない。もはや一人の高校生でもノンポリであってはならないし、ノンポリなぞといって喜んでいられる時代は過去の遺物とさえなろうとしているのだ。

現実から逃避してはならないとし、先進的高校生によって担われてきた高校生運動は、ともすれば運動の中に自己を安住させ、逆に逃避の場所としてしまう悪しき傾向を保持していたが、このような傾向は断乎として止揚されるべきであるのだ。

運動の中に自己を置き、社会変革を自己の生きがいとし、社会的実践の中で真に生きる道を見出さなくてはならない。

運動は決して補助的なものではなく、とりわけ七〇年代は断じてそうではない。毎日毎日の生活の中で思考し、実践しなくてはならないものとして闘争は展開されるのだ。

そうでなければ、敵の弾圧の前に一切打破されるであろう。今は破防法時代であり、高校生といえども帝国主義国家は弾圧を差別しないのだ。したがって一時的な闘争組織は日常的な、しかも強固な組織にとってかわらなくてはならないし、今までのような、一人よがり的な反撥から、組織的な階級的な〃暴力の複権〃を築きあげ、自己のものとしなければならない。

平和的階級闘争の時代はおわり、死にあえぐ敵を見、革命の現実をはっきり認識する中で、自己が歴史的な人間――プロレタリアートの時代に向かう一員として、行動原理を確立しなくてはならない。もって激動を準備し、全ての高校生を主導し抜くためには、大衆と自己を区別すると同時に、大衆の中にはいり、大衆の意識――常識の哲学に、マルクス主義を大担に持ちこみ、大衆と自己との熱き交通形態を創りあげ、大衆から学び、また逆に大衆の真に望んでいるものを革命的に引き出さなくてはならない。

われわれの望む帝国主義打倒は、全高校生への11月闘争の持ち込みであり、浸透であり、このことは意識的な働きかけの行為によってのみ成しとげられるものなのだ。クラス討論はその最良の方法であり、また自己の練磨のいいチャンスである。この実践が貫徹されない限り、ブルジョアジーに対する軽蔑感と、プロレタリアートに対する劣等感にはさまり苦しみ続け、自己の出身階級に対する罪悪感を宗教的にしか表現できないであろう。

帝国主義者の意図するとしないにかかわらず、全面的危機は開花しており、その苦しみの表現がわれわれに対する狂気じみた弾圧と、11月闘争への報復としての長期拘留、実刑判決であるのだ。七二年沖縄「返還」は、人民タブラカシ政策であり、その破産は七〇―七二年における「沖縄奪還」の闘いの中ではっきりするだろう。沖縄県民と日本プロレタリア人民の闘いの爆発は今からしても全くはっきりとしており、われわれはしたがってその一層の危機を待っているわけにはいかない。侵略とは内乱を志向する全ての人民をたたきふせてはじめて可能なのだ。内乱か侵略か、こうした時代として、

七〇年代とりわけ四～六月安保沖縄決戦をトコトン闘い抜く必要がある。

四・二八沖縄奪還闘争は全人民的課題であり、全ての高校生が眠りからさめ、街頭をうずめつくすこうした闘いでなければならない。

七〇年代高校生運動の先端を担う一人一人は、具体的には侵略を担う一員としての自己を否定しなければならないし、さらにそのベクトルを社会変革への実践におきかえてゆく事によって倍化させていく、こうした最も根底的な社会的実践の中での学習―共産主義原理の把握に基く帝国主義打倒こそ、学習であり、生活は闘争である。これを高校生運動の原点としなければならない。故に政治活動への規制干渉・禁止・弾圧を粉砕することは、われわれの生きる道であり、全国高校生が政治闘争の先頭に起つ、この事が高校生運動―社会的存在としての自己の発現に他ならない。弾圧には反撃を、そして帝国主義の危機をさらに押しすすめよ。

日帝にとっての致命的環、安保体制の粉砕、その実体的支柱、沖縄を日本プロレタリア階級のもとに奪還せよ！

こうした闘いは四～六月全都に無限の人民を結集させることによってはじめて可能であり、とりわけ自己の思想を大衆＝常識の哲学にぶつける中で自己の思想を強固に構築し、かつクラスを革命的に組織しなおし、沖縄を、高校教育を、マルクス主義等を、積極的に討論の中で〃生きたもの〃としなければならない。

革命とは、まことに生活のすみずみまで浸透するものであり、われわれを含めて全ての大衆の不満・怒りを集約し、爆発させるベクトルを内包し解決するものなのだ。革マル派のオモチャ＝反戦高連の平和ボケをのりこえ、ML系諸君の日和見主義、屈服をわれわれの教訓とし、全ての高校生、反戦高協第二回大会に結集された全ての先進的高校生諸君は、四～六月安保沖縄決戦を闘う準備を全て担い、洪水の如き大衆の街頭に登場せしめようではないか。

四～六月全人民的高揚によってもたらされる政治激動は、佐藤内閣を決定的危機に迫りやり、ブルジョア支配の動揺をもたらすであろう。万国博や国際連合総会で、「大国日本」の威信を確立しようとやっきになっている佐藤内閣の足もとで、学校や警察や自衛隊では抑えのきかぬ政治的激動が到来し、「返還が決定した」と全てが終わったかの如きペテンをもってすりぬけようとしている沖縄で全軍労の闘いが火を吹き、そしてそれが沖縄の教育の帝国主義的反動の中で、教職員会と沖縄高校生に燃えひろがるならば、佐藤内閣の破局は明白である。

四～六月全てを投げうって、憎むべき既存の体制・束ばく・規範を拒否し、闘い圧倒的高揚をつくり出そうではないか。

六九年、ほんの一寸高校生が腰を上げただけで支配者は驚き、教師はあわてふためいてやっきになっている。七〇年、われわれは本格的一歩を踏み出すのだ。そしてわれわれが一歩を踏み出すことがどんなに恐ろしいことか思い知らせてやろう。高校生を先頭とする闘いで打倒された南朝鮮の李承晩の悪夢を日本の支配者階級に再びよみがえらせてやろう。ベトナムやアラブで闘っている高校生と同じ質を、われわれ日本の高校生も持っていることを思い知らせてやろうではないか。

高校生が、ひとたび大衆的に闘いに起ち上がるならば、その打撃力たるや大学生の比ではない。全ての高校生は六月安保決戦の闘いの先頭に起とう！　未来社会の夜明けをわれらの手で切り開こう！

大会へのメッセージ

反戦高協の諸君へ

「未来は青年のものである」

革共同書記長　本多延嘉

未来は青年のものであるーとはドイツ革命の青年闘士カール・リーブクネヒトのことばですが、諸君の未来には文字通り日本の命運がかけられています。日本の四五〇万高校生はそれ自身、旺盛な活動力と厳正な批判精神を有する巨大な社会階層をなしているばかりでなく、将来の労働者階級、農民、インテリゲンチャーの無限の予備軍としての役割と位置をも占めております。日本の高校生が、日本帝国主義のアジア侵略と反動政治に屈服し、資本の奴隷としての道を甘んずるのか、それとも、安保粉砕・日帝打倒の旗を高々とかかげて自由のための若き戦士としての道を決然として選ぶのか、この二つに一つの歴史的選択によって、七〇年と、それを突破口とする七〇年代の日本階級斗争の行くへは大きく決定されるのです。それも、日本高校生運動の最良の戦士である諸君の活動のあり方一つにかかっているのです。

ところで現在、諸君のまえには、二つの重大な歴史的任務が課せられています。第一の任務は四月ゼネスト、六月安保決戦を基軸に反逆の火柱を高くもえあがらせ、四五〇万高校生全体を戦闘的激動のルツボにたたきこむことです。狂瀾怒濤のたたかいのなかでこそ、高校生の巨大な思想的変革も可能となります。第二の任務は七〇年斗争の真只中で共産主義的自覚をふかめ、自分を不屈の革命家に鍛えあげることです。レーニンのいうように、一年、二年の社会主義者になることはそんなにむずかしいことではありません。いわんや、一週間や一ヵ月だけの反逆者になることはたやすいことです。しかし、七〇年代の内乱的死闘の時代に必要なのは、一生をかけて革命の事業にとりくむ本当の社会主義者です。必然の王国から自由の王国に飛躍する世界史的大事業を達成するためには、われわれは、なにものをも焼きつくすにはおかない情熱ばかりでなく、どんな逆境のなかでも希望の火を不屈にもやしつづけ、それを断乎として貫徹してみせる強靱な闘志が大切です。こうした革命的資質をもった青年たちが工場を、職場を、学校を、農村を、兵舎を、地域を革命のとりでにして生々と活動を開始するとき、日本の未来を青年の手に

本当に握りしめる日がやってくるのです。

カール・リーブクネヒトの不滅のことばに新しい生命力を与えるために、ともに前進しよう！

（東京拘置所にて）

最良の友人たちへ

全国部落研連合

部落解放運動の斗う翼を代表して全国から結集された斗う高校生に、熱烈なる連帯のメッセージを送る。

歴史は青年によって動かされてきた。現在の人民の歴史を担っているのは、反戦青年委員会であり、全学連であり、そして、反戦高協である。差別に対して斗って来た部落の青少年の目にも、特に十・八の羽田斗争以来、権力に対して誰が最も勇敢に斗い、全人民を勇気付けて来たか、誰が機動隊の前で、おじけづいて敗走したか、全く明白であった。

白ヘル軍団、その最も若々しい青年達である反戦高協諸君こそ、怒れる落隊の青少年の最良の友人であり、同志といえる。

諸君！　全国の斗う高校生が学園解体の斗いを開花させる以前から、部落の小学生、中学生、高校生らは、学校内の差別徹底糾弾を激発してきた。教育権力やマスコミらは、それを「暴力教室」とか、「非行少年」とか云って弾圧し、次々と鑑別所に送って来た。一般の教育熱心なる父兄らは、そのような学校を忌避して毎年大量の越境入学をして差別を広めて来た。

だが、我が「非行少年」らは、授業をマヒさせ、差別教師を追い回して差別の非和解性を、即ち、如何なる意味においてもブルジョワ社会での権力との、そして又、人民の内部的融和はありえないことを暴露し続けて来た。我々は、今、部落の青年にかけられている差別裁判、—狭山差別裁判実力糾弾粉砕斗争を闘っている。この斗いは、かって全国水平社の十六、七才のうら若い部落青年達が、天皇制国家に、決死的にいどみ、展開して来た、部落差別徹底糾弾の暴力斗争を現在的に復活させる斗いとして、そして更に、日本帝国主義を打倒し、日本革命を真向からかかげ、実現する斗いの環として取り組んでいる斗争である。

我々が諸君と手を結ぶことの出来るのは、唯このような斗いの中に於てであり、それ以外では一般人民と部落民は権力の仕組んだ差別者と被差別者の関係でしかないのだ。

諸君！　共に斗おう。諸君らのスローガンを全て支持する。

七〇年三月二十五日

固い連帯の握手を送る

東京地区反戦青年委員会世話人　藤原慶久

昨年四・二八沖縄奪還斗争を前にして、反戦高協諸君に、私が闘いへの最后の呼びかけをしてから既に一年近くを経過しました。

この間、我反戦派労働者は、日本階級闘争の主力として登場して闘う高校生諸君もまた飛躍的な前進を成し遂げ、本日ここに、反戦高協第二回全国大会を開催するに至ったことを心から諸君と共に喜ぶものであります。

昨年、十一月決戦において、我々は本土―沖縄一体となった労働者、人民の斗いの大爆発で、敵の安保非常体制を打ち破り、沖縄「返還」のベテン的解決で、労働者、人民をたぶらかし、闘いを鎮静することによって、「城内平和」のうちに、アジア侵略戦争体制への移行を遂行せんとした日本帝国主義の野望を見事に粉砕しました。

闘いによって、返還のベテン性は徹底的に暴露され「城内平和」の望みは、敢無く互解したのであります。

他方、戦闘的労働者人民は、十一月決戦の勝利によって、自己の力への確信をより一層深めました。

十一月決戦以后の彼らの激烈な攻防戦は、十一月決戦勝利の上に闘われているものであるということを、我々は確認しなければなりません。

十一月以降、ブルジョワジャーナリズムによってくりひろげられている、沖縄「返還」の大キャンペーンと、権力と資本による、革命的左翼への集中砲火の攻撃は、表裏一体をなすものでありますが、その狙いとするところは、革命的左翼と人民大衆を分断し、十一月決戦の全人民的浸透を阻むことをもって、六月安保決戦への、労働者、人民の決起を未然に防止せんとすることにあります。

しかしながら、かかる敵の攻撃は、我々がそれを正面から受けて立ち、逆に職場や、学園や、地域に闘いを拡げることによって、十一月決戦の全人民的浸透と、闘いの勝利的前進を生み出しているのが現実の姿であります。

政治的巻返しをはかる敵の攻撃は、彼等の意図に反して、熾烈な攻防戦を呼び起し、全労働者、人民を闘いの渦中へとひきずり込んで、内乱的死闘を不可避的に昇進させていると言わねばなりません。

かくして、危機深まるアジアへ「城内平和」なき侵略戦争体制への移行を、迫られる日本帝国主義にとって、今や、七二年沖縄「返還」は、革命的反乱を導く危機の導火線へと転化し、七二年「返還」は、日本階級闘争の帰趨を決する重大な集点と化したのであります。

七二年に至る、沖縄「返還」過程は、権力の圧殺による侵略戦争への道か、それとも、労働者、人民による革命的反乱の道かを選択

する過程として、全人民の前に提示されているのであり、返還準備過程との対決こそ、沖縄奪還・安保粉砕・日帝打倒の闘いの鍵をなすものであることは言うまでもありません。

したがって、来るべき四月―六月決戦は、七〇―七二年の成否を決する重要な闘いなのであり、まさに、七二年決戦への突破口を切り拓くべき斗いなのであります。

四月―六月決戦における我々の敗北は、二年有余の血みどろの闘いと、十一月決戦の勝利によって得た成果を一切無に帰し、闘いの重大な後退を、我々に強いるのでありましょう。我々は全力をあげて六月決戦に決起しなければなりません。

しかし、このような情勢を認識し得えぬ既成左翼が、総評の六月ゼネスト撤回に見られるごとく、安保・沖縄闘争を完全に放棄し、帝国主義への無限の屈服と、後退を続けていることは諸君の知るところであります。

ところが、十一月決戦を闘ったわが革命的左翼の内部においても、我々を除くすべての党派は、敵の狂気の如き弾圧に恐怖し、敵の攻撃の激化が、重大な危機に基づくものであることを見抜けず、十一月決戦敗北論や、日帝美化論をふりまき、帝国主義への屈服を強め、また、沖縄奪還闘争の正当性と、決定的意義を理解し得ぬがゆえに、闘いの展望を全く喪失し、遂には、四月―六月決戦から逃亡するという事態が生じているのであります。

したがって、今や、四月―六月、安保・沖縄決戦の勝利を切り拓く一切の責任が、我々の双肩にかかっていると言っても過言ではありません。

だが、同志諸君！　十一月決戦もまた同様の状況の中で、我々が、勝利に導いたことを考えるならば、このようなことは、さして驚くにあたらないことであります。

我々は、自らの掲げる沖縄奪還・安保粉砕・日帝打倒の旗の正しさを、増々確信し、かかる時こそ革命的共産主義運動の飛躍の好機であると考え、闘いに献身せねばなりません。

四・二八沖縄奪還闘争において、わが反戦派労働者と同じく、はじめて武装軍団として登場した反戦高協の高校生諸君は、十一月決戦の主力として闘い、沖縄に反戦高協の旗を打ち立て、遂に二・一一斗争において、首都三千の高校生の、大デモンストレーションを先頭に、全国的な大闘争を展開し、不抜の力を確立するに至りました。

高校生運動は、今や、日本階級斗争の一翼を形成し、全学連と並ぶ日本プロレタリア階級の強力な同盟軍としての位置を占めるに至ったのであります。

四五〇万高校生の政治闘争への決起は、あらゆるものを粉砕しつくす巨大な力であり、敵階級をして、恐怖のドン底へと叩き込むでありましょう。

わが、反戦派労働者は、既に、二月二十八日・三月一日の討論集会の圧倒的成功をもって、バリケード春闘、四月―六月安保決戦への大進撃を開始しました。

全学連第二十七回大会は、四月ゼネスト・六月安保決戦への戦闘開始を宣言するのでありましょう。

本、反戦高協全国大会もまた、四五〇万高校生の、四・二八―六月決戦への総決起を熱烈に宣言するであろうことを、私は確信するものであります。

同志諸君！　日本プロレタリア革命の勝利を目指して斗おう！
反帝・反スタ世界革命の勝利を克ちとれ！
固い、固い連帯の握手を送る！

ともに試練に打ち勝とう

反戦高協中央書記局員　奥川勝彦

反戦高協第二回全国大会に結集された全ての闘う高校生諸君に固い連帯の挨拶を送ります。

我々が全力を投入して闘い抜いた十―十一月決戦は、今や三里塚、沖縄全軍労の闘いへと受け継がれることにより、増々その正しさを明らかにしている。

一方十―十一月決戦の、全人民的武装闘争の勝利的展開によって侵略体制への城内平和的移行を打ち破られた支配者階級は、自らの政治生命をかけて、狂気の弾圧を開始している。学生はもとより、革命の主体としての、反戦派労働者に対する大量起訴、長期拘留、そして、遂には高校生をも起訴するに至った。しかし、このことは何よりも、我々高校生運動が、革命的左翼の一翼を担う部隊として登場しつつあるということの証査に他ならないだろう。

「勝利した革命は、より密集した反革命を生むが、それを突破して前進する」という、生きた弁証法に示されるごとく、我々は、弾圧されればされるほど、自らの試練として受けとめ、逆にその中に敵の弱さを見抜き、より巨大な隊列をもって登場するだろう。

十―十一月決戦を、高校生戦線で唯一独自軍団をもって闘い抜いたわが反戦高協は、その責任において、七〇年代階級闘争を全国四五〇万高校生の先頭に立って闘わねばならない。

第二回全国大会は、第一回全国大会が、十―十一月決戦の性格を明らかにし、正しい方針を提起することによって、その勝利を保証したように、四月―六月決戦を正しく位置付け、その爆発を準備するものでなければならない。

全国の高校生諸君！

十―十一月決戦の切り開いた地平を大担に確認し、本大会の圧倒的成功をもって四月―六月決戦に総決起せよ！

沖縄奪還・安保粉砕・日帝打倒！

スカイブルーの旗の下、全ての闘う高校生は、反戦高協に総結集せよ！

高校生は、政治闘争の先頭に起て！

共に斗わん、いざ

（東京拘置所にて）

三月二十四日

「奔流」主要論文再録（臨時号 No.83 No.84）

1・14三里塚決戦勝利全国高校生総決起集会
1・15三里塚現地決戦へと総結集せよ！

七〇年代高校教育・卒業式闘争論のために

卒業式闘争勝利・帝国主義教育粉砕！

2・4全軍労支援、2・11紀元節粉砕闘争を通して全国の高校生は政治闘争の先頭に起て！

反戦高協中央書記局

1・14三里塚決戦勝利全国高校生総決起集会
1・15三里塚現地決戦へと総結集せよ！

反戦高協中央書記局

全国の闘う高校生諸君！

激動と試練の六九年は終り、今や多くの困難性を伴いつつも歴史を我々の時代へと切り開く輝かしい七〇年が、確固とした展望とゆるぎなき勝利の確信に燃えて開始された。この燃えるが如き勝利感と七〇年を起点とする七〇年代へつき進む不退転の決意こそは、まさに十～十一月決戦の試練に全組織的に耐えぬき勝利したもののみがもてる確信なのである。そして今我々はブルジョアマスコミの「過激派は壊滅した」「中核派は崩壊した」という自己慰安的デマゴギーとは全く逆に「沖縄奪還・安保粉砕・日帝打倒」日本革命戦略の下、全人民の中に不抜の地位を築きあげている。我々が七〇年代に経験するであろう反革命との総力激突の中での巨大な困難、それがもし組織的「壊滅」を伴うものであっても、それが我々を強固にし一層飛躍させるものであり、そして日本革命勝利に向けて必ず経なければならぬ過程ならば、そうであるならば我々は喜こんで幾回も「壊滅」しょうではないか。

時まさに日本帝国主義者は、ペテン的「沖縄返還」を軸とする七〇年のりきり策破綻の苦悶の中で新たなる攻撃を「侵略と収奪の基地」＝三里塚新空港建設として開始している。正月休みもない突貫工業、私服、機動隊ガードマンの弾圧体制の飛躍的強化、十二月十六日の「事業認可」による強制測量農地強制収用こそは、日本帝国主義者のもはや一歩もひけぬ危機を暴露している。既に全国の闘う同志に対し反対同盟・全学連現闘から三里塚決戦総結集の大号令が発せられ、決戦の日は刻一刻と迫っている。全国の闘う高校生はすべての決戦態勢をうちかため、一人も残すことなく十四～十五日の連続闘争に総結集せよ。

12・20反戦高協大政治集会の獲得したもの

六九年は全ての闘いが十一月決戦一点にしぼりあげられる過程であり、日本革命実現に向けての全ての要因が登場しその本質がするとく区別された過程でもある。

戦後、帝国主義アジア支配体制が、米軍のベトナムからの軍事的＝政治的敗退により根底から動揺し、アジアを危機の焦点と化す内へつき進まざるを得ない日本帝国主義の危機の一層の深化とそれに伴う強権的国内支配体制の確立という客体的条件、それに対する社民・スターリニストの無対応・反革命的対応、革マル派の第二スターリニスト的本質への自己純化、中間諸潮流の動揺―分解―没落、他方での反戦派労働者・農民・高校生の抬頭という主体的条件、この主客にわたる一切のものが十一月決戦を経る中で革命と反革命への大分裂と大激突を開始する階級的構図を作りあげる過程が六九年であったのだ。そして労働者本隊の階級的登場を展望する反戦派労働者、闘う農民の出現と共に、全国四五〇万高校生の政治過程への登場こそ、「革命の現実性」を一層現実的たらしめている。未成年というブルジョア的基準のもとに一切を剝奪され「高校」と「家庭」という壁の中にとじ込められ、非人間的生活と無権利状態を強いられてきた高校生が、卒闘、四・二八、修道、掛西、青山を経る中で、反戦高協の指導の下に政治闘争に決起したことの意義は限りなく大きい。

そして十一月決戦を生命をかけて闘い抜いた者によって二十日集会をもたれたこと、このことが集会の圧倒的成功の根拠であり、第一の意義である。十一月決戦に敵対し逃亡した他党派高校生組織が、独自の総括集会を行なうことができないというみじめな姿をさらしている。（特に十一月決戦に敵対し逃亡し反革命の側に組した革マル派＝反戦高連は二十日に予定していた彼らの集会さえも破産するという無惨な結果である）というのはあたり前のことなのだ。

試練に耐え抜いた者のみが十一月決戦勝利の核心とそれを基底にすえた七〇年代の展望を語りうるのであって、12・20集会は見事にそれをなしとげたのである。12・20集会成功の第二の意義は、十一月決戦を軍団として闘ったという主体的条件にささえられて反戦高協の組織的＝ボルシェヴィキ的確立にむけての闘いを開始したことである。

十一月決戦においてはっきりした反戦高協の脆弱性を「日本革命に勝利する党の建設」という認識をもとに、一方ではマル高同の党的強化による指導体制の強化という方向と、他方ではボルシェヴィキ的体質の獲得（プロ前衛の意識・革命に対する献身性・その忍耐・自己犠牲・革命的英雄主義）の二方向を主軸とすることにより、反戦高協を七〇年代高校生運動の全国指導部へと強化飛躍させることにより、実践的に克服することを目差している。無条件の中央集権を基礎とする共産主義者の自覚にもとづいた鉄の規律こそはボルシェヴィキ党の組織原則である。中央―地区、地方―支部というタテの系列を軸とするピラミッド的党組織の日常的活動を基礎としつつ、中央の全国各地の組織活動の日常状態の正確な掌握と、そしてまた地方・地区機関の中央との一体性を日常的にかちとっていくという二方向からなされるべき反戦高協の全国指導部への飛躍は、既に12・20集会において多数の地方代表（青森、仙台、秋田、新潟、群馬、茨木、栃木、長野、山梨、千葉、埼玉、神奈川、愛知、三重、岐阜、京都、大阪、兵庫、高知、岡山、広島、九州、沖縄）の結集と相互の熱気あふるる討論によって開始されている。

さらに反戦高協の全国指導部への飛躍は武装せる反革命として第二のスターリニスト的本質を自己純化させた革マル派を徹底的にせん滅することを抜きにしては語れない。十一月決戦の前段階から官・許の運動の道を歩んできた革マル派は今やスターリニストの反革命的任務を補強する存在となっている。彼らは反帝・反スターリン主義を歪曲し、うらぎり、現代の本質的危機を見失い、スターリン主義を永遠化し、帝国主義スターリン主義千年支配論を主張し、「革命の現実性」を否定し、議会制民主主義はゆるがずとして警察国家化粉砕のスローガンを否定し、労働者の闘いを民同の枠内におとしこめ、さらに全共闘運動を否定している。革マル派のこのような立場は革命の放棄であり革命の否定でしかない。

我が反戦高協が10・20集会において革マル派せん滅を第一級の課題としたのは、20集会獲得物の一つであるのだ。12・20集会で得た獲得物の第三点は、前一、二を基礎にしたうえで「全国高校生は政治闘争の先頭に立て！」「高校を安保粉砕・日帝打倒の砦に！」の大路線を高々とかかげ、六月安保決戦へ向う高校生運動の任務を鮮明にし、戦闘態勢の強固な構築を全面的に開始したことである。

既に十一月決戦における青山高校の砦死守戦、高校生軍団等に見られる如く、高校生の闘いが日本帝国主義と直接ぶつからざるを得ず、また闘争の直接的契機の多くが「政治活動の禁止」に対する反撃である時、高校生のもつ矛盾は政治闘争に決起し日本帝国主義を打倒することによってしか解決することができないものとして位置づけられている。その認識の上に立って12・20集会において、一月三里塚決戦、卒業式闘争、四・二八沖縄奪還闘争、そして六月安保決戦へと全力量をかけて闘うことを決定したのだ。

四五〇万という厖大な数、そのエネルギー、数千の砦と化し武器庫とすべき高校、重要な人間を隠すアジトと化すべき家庭等、安保決戦までの過程で果すべき役割は大きい。既に一月三里塚決戦にそなえて、全関東の先進的高校は現地三里塚で二日間の合宿をもち現地のすみずみまで歩いて地理を覚え農民と交わり闘う体制を着々とととのえ、さらに東京の高校では十四～十五日に三里塚バリスト突入への体制を準備している。こうして一切の高校闘争が六月安保決戦にむけて大合流し、高校を砦として出撃拠点とし革命家養成所とし、独自の力で武器を調達し運び、作戦をたて指導し、軍団を形成し街頭におどりでなければならないのだ。

十一月決戦を闘った高校生のみによってもたれた12・20集会の意義はかくして限りなく大きい。

全国高校生は1・14、15三里塚へ総結集せよ

六八年一月は佐世保エンプラ闘争であけ、六九年は東大安田砦攻防戦で始まった。そして今や七〇年代の内乱的死闘は三里塚決戦をもってその幕を切っておとされようとしている。

十一月決戦を安保粉砕・日帝打倒をかかげて闘いぬいた我が反戦高協にとって今開始された三里塚決戦は、避けて通ることのできない日帝からの最大の挑戦であることは明白である以上我々は断乎としてこの挑戦を受けてたち、日帝の体制的危機を内乱へと転化しなければならない。

帝国主義戦後世界体制の根底的動揺のふかまり、ベトナムからのアメリカ帝国主義の軍事的＝政治的敗退とそれを導火線とする帝国

主義アジア支配体制の全的崩壊の危機の深まり、日帝の経済的矛盾の一層の深刻化とそれによる体制的危機のふかまり、アメリカ帝国主義の沖縄の軍事的分離支配の破綻とそれを補強するための日帝の一体化政策のいきづまり等々に規定されて、七〇年代にむかう日本帝国主義は、日米共同声明にはっきり明らかになったように沖縄の永久核基地化を主軸とした日米安保同盟政策の再編強化により、アジアへの強盗的侵略にむけての国内態勢の確立の道をつき進んでいる。日米同盟を戦略的基軸にした日帝の核武装化・軍事化、そして日米共同作戦下における日本全土の総基地化、即ち道路・鉄道・港湾・空港等の諸施設の自由な軍事使用の沖縄と並ぶ最大の環として三里塚空港はあるのだ。さらに韓国を足がかりに東南アジアに進出し東南アジアを自己の経済圏にせんともくろむ日帝にとっては、SST時代にそなえるべく航空力の飛躍的拡大は長年の願望であり、それを新空港建設によって現在一日六十便に拡大することによって成し遂げようとしているのである。かつて鉄道がそうであったように、一見文明的な空港建設は「侵略と抑圧と収奪の基地」と化すのである。かくして三里塚新空港建設は七〇年代にかける日本帝国主義の帝国主義的表現なのである。それ故三里塚と沖縄は決して切り離して闘うことはできないのであって、この両者を切断し別個のものとして考えることは決定的な誤りである。

さらに我々は三里塚決戦が七〇年代の農民反乱の開始でもあることをはっきりと確認しておかなければならない。空港建設に伴う直接間接の土地収奪と生活困難に陥し込められる農民が二万数千戸にも及ぶ事実、かつての賛成派・条件派の農民でさえもとうてい承服できぬ低保証金、三分の一に減少した代替地等の事実は、まさに内外にわたる動揺と矛盾の激発により体制的危機を深めている日帝が農民を犠牲にし農村を破壊することを危機のりきりの一つの柱にしていることを示している。一方では食管赤字二千数百億円、過剰古米の処理に悩みつつも政策貿易による年間四十数万トンの米輸入とアメリカから三百六十万トンに及ぶ小麦輸入は農民を破産させ、しかもそれに支払う外貨が獲得する外貨の四分の一という財政負担の大きさは、高米価・価格支持政策と零細土地所有による農基法体制を破綻させており、他方農村から流失する大量の若年＝低賃金労働力が既に涸渇している現在「農家戸数の急激な減少を伴う」農業政策が必要と叫ばれている。かくして「国際分業にかてる農業」とか「農業の生産性向上」とかの名目の下に、従来の農民保護政策は悪しきものとして棄てられ、「総合農政」の下に、五〇ha以下の農家きりすて、稲農転換・離農促進・土地収奪・食管廃止による国際・国内的自由競争等をおし進めることにより、農村を徹底的に破壊し財政負担からのがれ、新たな労働力を獲得することを通して経済的諸矛盾の体制的危機への転化を防止せんとしているのだ。だがかかるのりきり策は日本全人口の30%をしめる農民を敵にまわさざるをえないし、農民もこのような暴政に対し手をこまねいて見ている訳にはいかない。農民と帝国主義ブルジョアジーとの対決はいまや必然化し非和解的非妥協的闘いにならざるを得ないのである。三里塚現地農民の闘いはそうした闘いの先頭に位置しているのである。それ故、我々の三里塚決戦への取り組みは、以前のようなカンパニア的農民支援に止どまっていることは許されないのであって、文字通り十一月決戦以上の態勢で闘わなければならないのであり、いまや「沖縄」「三里塚」を軸として六月安保決戦へと大進撃を開始しな

ければならないのである。

四六年四月一番機離陸を至上命令とする日本帝国主義は今一歩も退くことはできない。「年内作業は十二月二十八日まで」と反対同盟にいいつつ、二十九日においても全機械・全労働者を投入して突貫工事を進め、私服・機動隊・民間ガードマン一体となった弾圧体制は、事業認可に伴う一月強制測量・強制土地収用にむけて日に日に強化されている。かかる中で反対同盟と全学連現闘本部は全国の闘う人々全てに対し一月十五日現地総結集の呼びかけを発し、既に全国反戦・全国全共闘は総力動員を決定し、又全国の大学・高校では三里塚ボリストの体制が作りあげられている。我が反戦高協は、十五日現地に総力をあげて結集することを決定し全国の高校生全てに対して呼びかけるものである。さらにあの反革命分子―第二のスターリニスト革マル派が「中核粉砕」のみを目的として十五日現地にくるという。農民の闘いを「ブチブルの闘い」として三里塚闘争に一貫して敵対し、社民にくっついてくれば来るでオデン泥棒をやるといった腐りきった革マル派は今や三里塚闘争を破壊することに血眼になっている。即ち現地の実行委員会は革マル排除が圧倒的に確認され農民の中にも革マル排除の気運は急速に盛りあがっている。革マル派が三里塚にくるならば、我々は今や革マル派せん滅の闘いが最終局面に入ったことを確認して即座にそれを実行に移すであろう。

全国の高校生諸君！　一月十五日三里塚現地決戦に総結集せよ。全ての高校生諸君は、十四日法政大学における三里塚決戦勝利全国高校生総決起集会に大結集し、全ての闘う仲間と共に三里塚になだれこもうではないか。

三里塚決戦勝利！
測量阻止・工事粉砕！
十四～十五連続闘争に全国高校生は総決起せよ！
全国高校生は政治闘争の先頭に起て！

七〇年代高校教育・卒業式闘争論のために
卒業式闘争勝利・帝国主義教育粉砕！

反戦高協中央書記局

序

第一次、第二次と打ち抜かれた沖縄全軍労の斗いとそれに連帯した本土の斗い、三年有余にわたる三里塚反対同盟の斗争を支援し連帯した革命的左翼の斗い、沖縄・三里塚を軸にして敵権力の十一月決戦以後も執ように続けられる弾圧と我々をおしつぶそうとする全ての反革命勢力の介入をはねのけて斗われた一月は過ぎ、今二月に入り全ての目は高校生の上に注がれている。六月安保決戦をひかえ権力―学校当局は息を殺し鳴りをひそめて我々の動向をうかがい、一方全ての斗う人々は我々高校生が一体どのような目もさめるような斗いを展開するのかと期待している。

卒業式斗争を事前におしつぶすための「譲歩」と弾圧が横行する中で、それをうちやぶり、我々はすべての斗う人々の期待に応えて卒業式斗争を大爆発させ、積年のうらみを一気にはらそうではないか。

一、高校教育の階級的本質

ブルジョア社会における教育は、特殊に資本の要請でありながら、公共の社会一般の要請であるかのような仮象をとって国家権力によって実行される。それ故、近代教育はその成立の端緒から本質的かつ現実的に労働力の国内開発と労働者の人的能力の向上を追求するという資本の内在的要求に貫かれたものとして機能してきた。帝国主義段階に於ては、産業構造の大巾な変化・技術革新に伴う生産過程の全的変様は、この公教育のもつ本質的階級的性格を強化し一層露骨にせざるを得ない。即ち六〇年代からのかかる変化は、一方では構造的不況に悩みつつも膨大な過剰資本を生み出し、他方では進行せる戦後帝国主義世界体制の危機を日米同盟体制によって自らの危機として内包せざるを得ない日本帝国主義に、その内外にわたる矛盾の処理を対外膨張―国際市場争奪戦へと必然化させ、そのことが国際競争の場において、経済の成長に寄与するものとして、あるいは資本競争にうちかつものとしての科学的創意、技術的総体、働くものの資質等の諸要因の総体としての「人的能力の開発」を教育に要求し、かくして基礎能力のかん養―能力主義教育が、大学におけるハイ・タレントの養成とそれに直結する後期中等教育における「一般的下部労働者の技術的能力向上」のために、大々的に推進さ

れるのである。そしてこのような能力主義の名の下に行なわれる「相対的剰余価値の生産は、労働の技術的過程及び社会的人員配列を徹底的に変革する」結果をもたらし、それは高校教育における「能力と差別」を必然化させ、さらに差別・選別体制そのものをも変革された社会的人員配列に見合った形で「多様化」として完成されていくのである。

一九五六年に実施された学習指導要領でコース制が導入され、受験進学向けと就職向けとの差別的分化がもちこまれたのを皮切りに、「小学区制・男女共学・総合制」といういわゆる「高校三原則」はうちやぶられ、六三年の経済審議会答申「経済発展における人的能力開発の課題と対策」、同じくその年に実施された第二回高校教育課程改定では主要教科に難易による内容差が設けられ、続いて六六年中教審答申「後期中等教育の拡充整備について」が発表され、「社会的要請」の名の下に「多様化」が鮮明にうち出された。これ以後この政策は一段と早められ、特に職業科の多様化は急速に進み、工業関係をトップに二四一科にも細分化されるに至っている。これらはいずれも調理科、秘書科、印刷科等々技能習得を目標にした学科であり、既に高校教育ではなくて各種学校であり、その一方普通科の中に「理数科」が設けられ、職業課程の水準切り下げと逆に、理科数学を三五単位以上も履習させるエリート養成が進められている。かかる多様化・能力・適性別選別体制をさらに具体的に追認固定化させたものが昨年九月に発表された高校教育課程改定の答申であり、これによってブルジョアジーの七〇年代高校教育体制づくりはほぼ完了するのである。かくして帝国主義段階における高校の役割り＝階級的規定は①労働力養成機関（解放派の諸君のように全くでたらめな個別権力論に基礎をおいた「教育工場」という規定はあやまっている）であり、②高校生の将来の社会的安定と社会的地位・消費水準の可能性を付与する分配機関であり、③そのことにより高校は高校生の社会的地位と「人生」の機会とを決定操作する統制機関であり、そのような統制された労働力配分の場所としての高校は、④既に労働市場としての競争の場である。我々高校生は入学と同時に早くもこの競争の場に投げ込まれ生産性向上にたえうる学力をつめこまれる。ますます高度化される生産性の向上は、一方に資本のために巨大な富を生み出すのに対し、生産者＝労働者はますます無価値なものとなる。技術的諸過程がかかるものとして労働者に対すると同じように、高度化され長期化される教育内容と教育制度に対して高校生活はますますみじめなものとなり、学習が耐えがたく苦痛なものとなり、その結果労働力選別場であり職業的分化過程でもある高校は、⑤我々高校生を奇形化する機関でしかなくなるのである。

二、帝国主義教育粉砕

以上簡単にふれてきた帝国主義的高校教育体制＝多様化・能力別差別選別体制は、ここ数年急速にたかまってきた我々高校生に対する「政治活動の禁止」を頂点とした自主性抑圧政策によって補完されてきた。サークル・生徒会活動のみならず、高校生活のありとあらゆる面にわたる規制と干渉は、「十年来の展望」をもってブルジョアジーが作りあげてきた高校教育体制からの逸脱、脱出、反発、反対等を許さぬものであり、そのような「けしからぬ」ことを「思

いつく」ような高校生を作り出さないようにする目的をもっている。日本帝国主義にとって高校教育体制は自己の体制維持の安全弁であり、帝国主義体制を再生産する機関である以上、それを破壊しようとする動きには激しい弾圧がかけられるのである。しかも第二次大学斗争が「大学物神」をこなごなに打ち砕くことにより、大学斗争の波は高校にもおしよせ、それを契機として帝国主義的教育体制そのものが大きく揺いでいる現在、政府・教育委員会は政治活動の禁止・処分あるいは学警協力の強化によって、何とかして斗う高校生を屈服させ封じ込めて、この破綻をとりつくろうとしているのだ。

それ故に、我々の高校斗争は、様々な直接的契機に拘らず、一まず完成された帝国主義的高校教育体制を防衛し、破綻をとりつくろうとする権力とあらゆる処分・弾圧のおどしや恫喝・家庭のしめつけをはねのけて、政府ブルジョアジーの政策破綻をさらに拡大させようとする我々との総力をあげての斗いである。

だから、現在の政府・ブルジョアジーの高校生に対する攻撃の本質を防衛的（＝現秩序体制への必死な封じ込め）であることを見抜くことのできない人達が「改編策動粉砕」やら「再編粉砕」などと無知を恥じずにわめいているが、それは全くあやまっており、スローガン化させるならば「帝国主義的教育粉砕」でなければならない。そして、かかる斗いは、決して学内改良主義によっては勝ち取ることはできず、現体制への「封じ込め」にも、現体制の革命的止揚（脱出やべ平連的単純否定ではなく）を以て応えなければ、その斗いは最後には体制内に包摂されてしまうのである。

階級社会の中にあって普遍性を目差そうとするものは、その階級性の否定として極めて階級的＝党派的でなければならない。

「高校生は政治斗争の先頭に起て」はそういった意味で七〇年代階級斗争の一翼としての高校生の位置、役割り、任務等を全て統括したスローガンなのである。超歴史的・超階級的な「真理」「調和」「学問」「人間」等々あるいは「話し合い」を持ち出してくるノンポリ諸君や教師は、自らの階級的立場に無自覚なままで、体制側に安全にして置いたままでの「説得」や「授業内容改善」（＝自主ゼミ）に満足する以上、その良心的意図にかかわらず結果するものは、体制防衛者と破壊者との敵対関係における「反動権力の手先」なのである。彼らの犯罪性をあばき出し彼らの反階級性をひきづり出すためには、「論理の力から力の論理」への転換＝「暴力の復権」が全高校生的に勝ち取られなければならないのである。

三学期はまさに我々高校生にとって「政治の季節」である。紀元節粉砕斗争に総決集した全ての斗う高校生は、満身の怒りと力をもって卒業式斗争を大爆発させよう。卒業式という学内慣行行事を粉砕すると共に、その一日の斗いが今まで強いられてきた高校生活にピリオドをうち、反戦反安保を契機として安保粉砕・日帝打倒＝「革命の立場」から全く新しい高校生活を送ろうとする人々や、一生斗い続けようとする人達を広範に生み出す斗いとなるならば、それは政府・ブルジョアジーにとっては恐怖の一日であるだけにとどまらず連続する「一日」であるならば、卒業式斗争のもつ意義は限りなく大きい。　全国の斗う高校生諸君！

六月安保決戦はもう間近である。

仲間をふやせ、斗う同志を飛躍的に拡大せよ。

2・4全軍労支援、2・11紀元節粉砕闘争を通して全国の高校生は政治闘争の先頭に起て！

反戦高協中央書記局

序

三里塚現地反対同盟七百人を先頭とし六千人の労働者・学生・高校生を結集して一月十五日の三里塚軍事空港粉砕現地闘争は圧倒的な成果をおさめた。それは三里塚・芝山の農民を限りない激励と支援とで埋ずめるとともに、強制測量を目差す政府・公団に大打撃を与えた。そして我が反戦高協も全国動員をもって四百五十名という大量動員を克ちとったのである。ML、ブンド、解放の動員が高校戦線的には一つもなく、高校戦線を代表する発言が反戦高協議長下村君によってなされたことは我々の任務を倍加すると同時により一層の決意を固めるものとしょうではないか。ところでこの三里塚闘争に「介入」することを記者会見まで行なって宣言した革マル派は当日三里塚に一歩もふみこむことが出来なかったというみじめな情況に追いこまれた。反対同盟もまた革マル派の反革命性を見抜き、これの排除を決定するといった事態は革マル派放逐が最終段階にいたったことを示すものである。我が高校戦線においても青山高校を先頭として構築された反戦高連の学内立ち入り粉砕とも相まって彼らの息の根は今や止められんとしている。ところでこの三里塚現地闘争を前にして一月十三日反戦高協の現地常駐部隊が作られ、三里塚の地において援農を基軸とする活発な闘いが始められた。機関紙「闘う高校生」を発刊し現地農民にとけこんだ反戦高協現闘の活動は全国の学友にささえられつつ多くの成果を勝ちとっている。

いまや大進撃を勝ちとった三里塚の闘いとともに七十年代をリードするものとしての沖縄闘争は全軍労の百二十時間という空前のストライキ闘争をもって情勢を一変させている。

銃剣のにぶい輝と対峙し、一歩もひかぬかまえを示している全軍労の闘いは六十年安保の三井三池闘争を目のあたりに再現している。そしてその泥沼的＝革命的発展は沖縄での階級闘争をいまにない規

模で実現している。大量の負傷者、逮捕者を出しながらまた右翼＝基地寄生のバー業者などのテロとも闘いつつ、全軍労は基地をとりかこむピケットラインを死守しているのである。いまや沖縄の基地機能はガタガタであり、極東戦略の要石はいまや日本革命への拠点と化してしまった。我々は声を大にして全軍労支援を宣言しょうではないか。

ところでこの沖縄の闘いの原点はアジア危機の深化という現実を軍事支配の強化と挑発においてのりきらんとする日米帝国主義の野望が沖縄基地強化として具体化されたところにある。こんどの全軍労のストを見ればはっきりする様に日米帝国主義は基地労働者を沖縄県民に依存しておくことが「アジア戦略の要石」が決定的時点において「革命の拠点」に転化することを支配階級の危機的直観から察知したのである。それゆえ、基地からの沖縄県民の排除としての首切り攻勢がかけられているのである。まず沖縄県民から土地をとり上げ、まだ不十分なのでそこにある職場からのしめ出しも行なうという悪らつきわまる攻撃なのだ。このことは全軍労の闘いが目指すべき道として首切り粉砕ー基地奪還を明確に示している。

さてこの地点から再度「アジア危機の深化」へ目を転じその上で日本国内へと論理を環流させて見るならば、政府・ブルジョアジーが今年の二月十一日「建国記念日」をいまになく盛大に祝おうとしている意図が赤裸々になるのである。そもそも二月十一日の紀元節が復活された歴史的背景に六五年の日韓条約締結を軸とする日本帝国主義の対外膨脹政策の国内における地固めとしてあったのであり、当の朝鮮が最大の危機に見舞れている現在、軍事力と国内反動体制の強化は必定なのである。アジア危機を媒介とした二大反動攻勢としての沖縄基地強化と紀元節の大々的鼓舞は一方の全軍労の首切り粉砕闘争、一方の紀元節粉砕闘争として完膚なきまでに反撃されねばならない。

以上のような情況の中で「すべての高校生が政治闘争の先頭に起つ」といったことの具体的指標を「2・4全軍労支援・沖縄奪還、2・11紀元節粉砕闘争」を提起する中で明らかにしたいと思う。

一、政治闘争と反戦高協の任務

十一月決戦において決定的に明らかになったように高校生の政治参加はその突出した部分にとって常識となっている。千人単位の高校生が「反戦」をさけんで、「沖縄奪還」のプラカードをかかげて文部省や国会へデモをかける時代なのである。いやすでに高校生の手から火炎ビンが放たれ、機動隊のジュラルミンの盾に突撃し、ゲバ棒が高校生の手によってふり下されているのである。高校にバリケードが築れることはあたりまえのこととなり、恐怖した教師たちが連日校内にとまりこんでいるのが昨今なのだ。

その第一の原因は現代帝国主義の矛盾が高校生の中に深く浸透したことである。だがそれだけでは不十分であった。それが明確な綱領的立場＝「安保粉砕・日帝打倒」によって武装された組織的高校生によって指導されたとき現在の高校生運動の高揚が立ち現われたのである。

ア　安保粉砕・日帝打倒

沖縄における全軍労の闘いの爆発、三里塚での闘いの永続的発展、そしてベトナムー朝鮮の危機として表われた戦後帝国主義の諸矛盾

の激化、これを我々は「三十年代型動乱期へのラセン的回帰」と呼ぶのである。三十年代型動乱期とは一九二九年のウォール街での株価の大暴落をきっかけとする経済的・政治的・軍事的混乱期を意味し、特に、これらの事象が帝国主義の危機として現われ同時に世界革命の問題をも内包していたことに注目するのである。

しかしながらこの三十年代の危機は革命の挫折と帝国主義戦争への突入、そして再度の帝国主義による世界支配の成立として一応の決着をもった。だがしかし本質的問題―プロレタリア世界革命による解放を見ていない以上再度の、それもより拡大された危機に見舞われるのである。それは①戦後帝国主義世界支配体制がスターリン主義との妥協の産物であり、②きわめて奇形的な経済体制―ドルを基軸通貨とした金―為替本位制をもち、かつこれがすでに破産している、③日本帝国主義の敗北によって引き起こされたアジア植民地支配の空白が中国革命の勝利およびベトナムにおける民族解放闘争として前進している。④以上のことがアジアを中心に危機を拡大再生産しつつ帝国主義本国における階級闘争の激化を招いているといった世界史的条件の下に現実化しているのである。我々は以上を正しく見すえ、日本革命を突破口として、危機のプロレタリア世界革命による止揚へと実現していかねばならない。よって我々は「安保粉砕・日帝打倒」の政治―組織路線を躊躇なく掲げるのである。そしてこのことが反戦高協を、すなわち高校生を政治闘争と大担に結合するのである。

イ　問われる高校生運動の飛躍

ところで以上のことを一人よがり的に確認したところで無意味である。我々にとっての問題は「安保粉砕・日帝打倒」の闘いに圧倒的高校生を組織することにあるからだ。

全国四千数百にのぼる砦と四百五十万人の軍団の創造、これが我々にとっての任務なのだ。「全国高校生は政治闘争の先頭に起て！」このスローガンの重みはいくら繰り返されてもされすぎることはないのである。自らの足下を見つめ、その任務の重さを感じるとき、我々は新たな決意のもとに一切の飛躍をかけねばならない。第二、第三の青山、修道を作り上げ、かつそれらとも訣別した地点に自らの闘いを準備する。このことが個々の高校生にとって最大の課題となっているのである。

二、学園における二月闘争

高校生における二月政治の問題は2・4―2・11―卒業式闘争として大々的に打ち出されている。我々はこの中で「すべての高校生が政治闘争の先頭に起つ」ことを確信すると同時に、その確信の内には我々がその中核であることの自覚という裏うちがあることも知っている。2・11全国統一行動一つをとっても反戦高協の全国性によってのみ保証されるのだということを。

この方針はとりもなおさずどれだけの大衆を「沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒」のスローガンの下に組織しうるかにかかっている。そして大衆を獲得しえたか否かが一目でわかるという特質をも、もちあわせている。活動家だけの一人よがり的運動が行なわれるならばここにおいて必ず破産が宣告されてしまうのである。我々が大衆の中にその主張をどれだけ持ち込めるか、つまり大衆的な情宣に勝利しうるか否かが直接に表示されるのである。このことはオーソドックスになったビラ、ステッカー、立てカンバンといった原則的学内活動が貫徹されてるかどうかを第一の目標とする。同時に「前進」と「奔流」という我々の二つの武器がどれだけ駆使されているか、学内に講読者を大量に作りあげられているか、これが第二の指標である。第三にはパンフレットなどを使用した学習会、実践的な課題をあつかった討論会、講演会を組織することである。そして以上の前提として、過程としてまたは結果として学内の政治指導部―反戦高協がいかに拡大強化されたかが最後のメルクマールとなるのである。「学園における二月闘争」とはいわゆる学内闘争ではない。明確に学内と街頭を結合した上でいかに大量的高校生を政治闘争の先頭に起たせるか、それの特殊な展開を意味しているのである。2・4、2・11ともに我が反戦高協からべ平連までをも含めた広範な人々が参加を表明し準備に入っている。その中で本当に大衆をつかみきる部隊として反戦高協が登場すべきなのである。たとえ2・4当日のゼネストが決議されなくとも、授業ボイコットや学内集会をもって我々がつかんだ人々を組織しそして全体集会、デモへと動員するのである。このことの内に反戦高協の飛躍があり、卒業式闘争の勝利展望が明らかにされ、4・28から安保六月決戦への血路が切り開かれるのである。

一月二十三日

編集後記

編集局はこの一ケ月間の大奮闘をもって三冊の機関誌を出したぞ！　№15の復刻、遅れに遅れたけれども出た№16、そして予定通りの別冊号。

これで充分とはいわないまでも「これが反戦高協の七〇年と七〇年代の方針決定盤」というやつだ。右手に爆弾・左手に「反戦高協」を持って六月安保決戦を勝ち貫こう！

（圭太郎）

反戦高協　別冊

□　発行日　一九七〇年四月十六日

□　編　集　反戦高協編集部

□　発　行　反戦高協中央書記局
東京都豊島区東池袋2の62の9
佐藤ビル内前進社気付

□　定　価　一五〇円／送料五〇円

1970年 4 月16日発行□反戦高協別冊□反戦高協中央書記局 東京都豊島区東池袋 2 の62の 9
TEL 984－8651 定価 150円